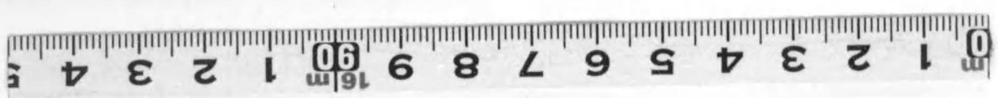
329
311



トエ4T-29
329-311

明治天皇御製集

大正
11. 9. 4
内交

刊行の辭

明治天皇が御登遐あらせられてより早や十周年、今日しもその式年祭を擧げらるゝに際し、わが大阪毎日新聞社は天皇の御盛德を回想すべく、茲に御歌所寄人千葉胤明氏に囑し、天皇の御製集を謹輯し、刊行することゝした。

明治天皇は東西の統率者を通じて、ひとり比儔を絶せる名君であらせられたのみならず、傳統的に和歌を以て治政の要道とせられた、わが歴代帝王のなかにても、古今に稀なる歌聖にてあらせられた。天皇は御八歳にわたらせらるゝ頃より、日々御父帝より五六の勅題を賜はり、たゆみなく歌

を御詠みになつたさうで、その詠み口の秀れて御早くあらせられたには、御側近く仕ふるもの、いづれも驚嘆し奉るところであつた。さればこそ、後年御歌會のある時に、一夜百首といつて、侍臣を集め題を賜はり、一夜に一百首を詠み給ふのに、侍臣の多くが苦吟徹夜に及ぶなかに、天皇はいつも誰よりも先に御詠みになつたといふのも、眞に理りある事と拜察し奉るのである。斯くばかり歌がお好きで、お上手であらせられても、それが爲に御政務に煩ふやうなことは決してあらせられなかつた。一言にして申さば、御歌を詠ませらるゝ御心は、やがて國務を執らせらるゝ御心であつたからである。天皇の御經綸が永く日本帝國々是の趨ふところを示すやうに、天皇の御作歌はわが國民の內生活を道德的に感情的に統一せられんが爲に高唱せられたかの感がある。御作歌のいづれもを通じて基調をなすものは、この大御心であるが、天皇一代の御製作九萬餘首のなかより、こゝに二百五十首を謹選し奉るについては、畏れながら特にこの邊に意を用ゐることを忘れなかつた。國民思想の統一難の論ぜらるゝ今日、日夕天皇の御製作を拜誦することによつて、國民各自に志を立て德を磨きたいからである。

本書の卷頭に光輝を放つてゐる天皇の御宸筆のうち、一葉は明治十二年八月十八日右大臣岩倉具視公の邸宅に行幸の節、同公に御下賜あらせられたもの、他の一葉は明治八年四月四日德川昭武侯の邸宅に行幸の際、同侯に御下賜あらせられたもので、公侯兩家の特別なる諒解を得て、その寫しを本書に挿むことを得たのは、本社の深く光榮とするところで、讀者と共に公侯兩家に對して多大の感謝を寄するものである。

この御集の編輯については、御歌所寄人千葉胤明氏に、題字の寄贈については、御歌所長子爵入江爲守氏に甚深なる謝意を表するものである。

大正十一年七月三十日

明治天皇十周式年祭當日

大阪毎日新聞社

御製集を謹解し奉るにつきて

謹みて案ずるに　明治天皇が不世出の英君であらせられたのは、今更に申す迄も無い事であるが、その御一代を通じての御偉績を伺ひ奉るに、あらゆる方面に亘つて、隨所に非常なる御功蹟を拜し奉るのである。抑も維新の鴻謨は　明治天皇が御十六歳の御幼時に於て思し立たせられた曠古無前の大業であつて、而してまた我が大日本帝國の眞個に永遠無窮なることを圖らせ給ふた深い〳〵大御心であつたのである。

回顧すれば德川三百年の鎖國は、さなきだに東海孤立の我が國をして、一層對外的刺戟から遠ざからしめ、世界の情勢が推移變改しつゝある事に關しては、全然沒交渉とならしめた。而も何ぞ計らん。この沒交渉の時代

に於て、英國の基礎は定まり、佛國は革命し、獨逸は進展し、米國は獨立したのである。否これ等諸外國は、力を盡してその國をより盛にし、より勢あるものとしたばかりでなく、更に虎視眈々として四方を物色したのであつた。露西亞の手が亞細亞の北に延びたのも、英國が濠洲より東洋に及んだのも、米國が布哇、比律賓に眼をつけたのも、佛國が南洋に及んだのも、何も皆我が國がこの鎖國の夢醒なる折柄であつた。時なるかな。米艦が浦賀沖に現はれた際に方つて、豁然として初めて長夜の眠りは覺めた。然り、長夜の眠より覺めはしたが、もうその折りには、既に列國の勢が眉庇近く押し寄せて來て了つた。加ふるに内には公武の紛訌あり、國步艱難にして殆んど收拾すべくも無きまでに動搖して居る。時の帝孝明天皇は頻りに宸襟を惱まさせられ、畏こくも十善の御身を以て、親しく事に當らせやうと遊ばされたのであつたが、天乎、命乎、事未だ成らざるに先ちて、

空しく御登遐あらせられたのである。

併しながら次で御登極遊ばされた　明治天皇の御英邁なる御英斷によつて、さしもの頽瀾をも既倒に回し給うて、内は王政復古の大猷を遂げさせられ外は列國との修交を重ねさせられて、敢然開國進取の國是を定めさせられたのである。爾來茲に五十年、國力益々加はり、國運愈々展び、今や實に世界の日本として、御稜威八宏に輝くの聖代とはなつた。國土の新に加はるもの、臺灣を初めとして、樺太に及び、更に朝鮮を併せて、兼ねて關東州一帶をその勢力圏内に收めつゝ、一屑動きなき帝國の礎を固められた而も恐れあることながら　明治天皇はこの一大隆盛を神の力と民の力とに歸し給うて、御身親らの御精勵御恪勤を露ほども誇らせ給ふ御事なくその國勢が揚がれば揚がるほど、益々神を敬ひ民を慈しませらるゝばかりなるは、何たる御謙德にあらせられるのか、何たる御美德にあらせられるのか

あゝ、斯ばかりの御德を積ませられたればこそ、我が大日本帝國の今日は將來したのである。

試みに見よ。明治天皇御在世當時に於かせられたる御製の數は實に十餘萬首の多きに上り、而もその數多き御製毎に、山よりも高く水よりも長き御乾德を明かに拜し參らせることが出來るではない乎。英雄回首卽神仙と云ふ詩があるが、我が歷代の御烈聖は、何れも現人神として、臣民同胞が絕對信仰の上に立たせられたのであるけれども、特に　明治天皇に於かせられて、初めて如實に現人神たる所以を拜して、誰れか無量の感激に打たれないものがあらう。

自分は何等の幸か、乏しきを以て職を御歌所に奉ずること茲に卅餘年、その間常にこの御製を拜見申し上げる事ができた、これを拜誦する毎に、餘りの畏こさと、餘りの辱けなさとに、感極まつて思はず知らず泣いたこ

とも屢であつた。若し夫れこの十餘萬首の御製悉くが均しく國民全般に亘つて拜誦すること許される時があつたならば、我が忠愛なる同胞は、又必や益々挺身奉公の覺悟を固持する事であらうと思ふ。何となれば既に世上に御洩らしになつて居る五六百首の御製だけでさへ、皆俱に身を立て、道を修め、家を齊へ、國に竭すの御聖訓として、朝夕服膺して以て大御心の萬一に副ひ奉らんことを誓うて居るではない歟。

さても　明治天皇の御製は、初めは故三條西季知卿に御示し遊ばされたので、明治十一年に故高崎正風翁に御内見の御沙汰があらせられたが、高崎翁は固く御辭退申し上げられたけれども、どうしても御許しが無かつたから、遂に御請けはせられたものゝ、而も翁は道に正廉氣節の士であつたので、謹んで言上すらく、御製を遊ばされることは、必ず萬機を御親裁あらせられた上の御事として、決してそれが爲めに國事を御等閑に遊ばされ

るやうな事のないこと、また歌道の事に關しては、一旦御請け申し上げた上からは、或は面を犯しても申し上げなければならぬことがあるかも計られぬ。萬一さある場合に於ても決して御咎めあらせられないやうに、豫め御許容を蒙りたいこと、それから更に御製は從前の通り三條西卿にも御示し遊ばされること、この三つの事は强ひて御聞屆けあらせられたいと願はれたのを　明治天皇は莞爾として快よく御聽き濟みあらせられたとのことである。

さて此御製拜見の御次第は、初めは　明治天皇御身親ら御認め遊ばされたものを、その儘お下げになつたさうであるが、高崎翁は苟も臣下の身として御宸筆の御詠草に打ち付けに御加筆申し上げることは、誠に畏れ多い次第であると感じて、爾來は女官に御代筆仰せ付られる事を願つた、それを勅封の上、高崎御歌所長にお下げになるのである。高崎御歌所長はこれを拜見の上、一通の御寫しを止めてまた元の通りに嚴緘して御返上申し上げられたのであるから、元老でも大臣でも、また如何なる大官でも、決してこれを承り知ることは出來なかつたのである。

高崎翁が始めて御製拜見仰付られし時に願つた事を御許し遊ばされた御事とは申しながら　明治天皇が如何に御寛大に渉らせられたか、又翁がいかに直言せられたかといふ事に就ての一例を申上げると、ある時探梅の御題にて、その日歸りに鎌倉の梅を見て來たといふ御製があつたのを、翁は梅を探る爲に遠い鎌倉まで行つて來るといふことは、それは殆んど不可能の事であるといふやうな御批判を申し上げた。するとその後數日を過ぎて翁がお召しに因て參内すると、鎌倉探梅は不可能といふが、實は昨日試みに侍從を遣はしたが、見事馬に乘つて鎌倉まで行つて來た。これでも不可能であるかとの御下問であつたが、翁は謹んで奉答するやう、成程察の逸

物を以て驅けますれば、鎌倉往復は勿論容易の事で御座いませう。併し御題が既に探梅と遊ばれた以上、道々、或は山に或は野に、梅の咲いて居る所を探り〳〵尋ね廻るのを以て本旨と致しますから、若し左樣に致しましたならば、果して鎌倉往復が叶ひませうや。と申し上げられた時に　明治天皇は呵々御大笑遊ばされて、さうか〳〵と御首肯あらせられたと申す事である。　明治天皇が能く人言をお納れ遊ばされたといふことは、この一事によつても明かに伺ひ奉ることが出來るのであるが、而もこれやがてその寛仁大度にあらせられた御事をも立證するものであると共に、また一面にあつては高崎翁の躍如たる面目を知ることも出來る。

轉じて古來の歌集を繙いて見ると、勅選の二十一代集の外、萬葉集から新葉和歌集までを合せても、尙且つ四萬首にも足らない位であるが　明治天皇におかせられては、御一方樣で以て優に十餘萬の御製を遊ばされたこ

とは、いかに斯道に御卓越あらせられたかといふ事を拜察する事が出來るが、中にも彼の日露戰爭當時からは一しほその御製の數も多くなつて、年々三千首乃至五六千首にも上つて居るから、日々御歌所長へ御下げ遊ばされる數も四十首よりお尠いことはなかつたのである。國事多端、內外非常の秋に方つて、一面には軍國の萬機を繁はされながら、一面には絢爛たる御心の華を御自在に開かせられた明治天皇の、如何に御雄々しくもまた優に御やさしい御日常であらせられたことよ。而してこの御製の多くは仁慈大量なる大御心から潤ひ出づる大御惠みの露の輝きであつた。自分等は常に御歌所にあつて、御製を拜寫し奉つて居つたから、深く〳〵肝に銘して忘るゝ暇とては無かつたのであるが、殊に拜見濟の御製を返上の爲に捧持して內大臣兼侍從長の處に行く度每に室の內外に涉りて長い御廊下にまで新しき白木造りの棚に　御璽の押された數百千の動記が印肉を干かす爲に

陳列せられてあるのを拜見した。是やがて名譽の戰死者または殊勳者に賜るべき物である事は申すまでもない、又その一方の御内儀におかせられては、かしこくも皇后宮御親しく繃帶製作を遊ばるゝといふ御有樣を拜承しつゝ深刻に感じたのは若しこの時に於いて優渥なる聖慮の程を外は出征將士も、内は一般臣民も拜誦することが出來たならば、士氣振興の上にも、民心緊張の上にも、非常なる効果があらうと思ふことであつた。で、此の事を高崎翁に話しをすると、翁は、それは言ふ迄も無い事である、自分も疾くより心懸けては居つたのであるが、嘗てかういふことがあつたといつて、次のやうに語られた。

先年自分がある御製を拜見して感嘆の餘りに、これを岩倉公に傳へたのがそれから夫れへと推し廣まつて、遂に一般にも拜誦申し上げるやうになつたことが、いつとはなく御聞に達したが、その時に許さぬうちは決して

漏らしてはならぬと仰せられた御事があつたから、言はゞ勅封を受けたものである。されば今更これを自分の口から申し上げられないのが誠に遺憾至極である。この事であつたから、自分はもう取り付く島も無いやうに思つた。併しながら更に考へて見ると、今や忠勇なる將士は、澤國江山到る處に身命を顧みずして、君國の爲めに盡して居る一方には、また忠良なる同胞が一層家業にいそしんで、毫も後顧の憂なからしめんが爲めに、孜々營々として勉め勵んで居るのは、これは臣民として當然の義務であるとは言ふものゝ、而もその勞苦は決して筆舌の能くする所ではないのである。英明仁慈なる陛下にあらせられては、辱けなくもこの民の勞苦を御憐察遊ばされて、戰場はかうもあらう、淋しい留守の家々はかうもあらう、雨や、風や、暑さや、寒さにはまた如何に過ごすとであらうと、只管叡慮を惱ませられた御有樣が、一度び金玉の御製となつて現はれたのをお洩らし申し

上げるとの出來ないのは、眞に千秋の恨事であるが、併しこの上願ひ上げる途が無いと思へば思ふほど、益々心がはやるばかりであつたから、私にこれを高崎翁の親友なり姻戚なる時の海軍々令部長伊東元帥や伊集院次長に物語ると、それは至極の事であるから何とか拜謁の機を見て、是非に御願ひ申し上げて見やうと言はれたが、その後伊東元帥から、昨夜御陪食の時に、天機殊の外麗しく拜せられたから、山縣公や伊藤公と共々に御願ひ申し上げて見たが、こんなつまらぬ歌をどうするかと仰せられた許りで、とんと御取り上げが無かつたのは、御謙讓の御德譽ふるに物なき次第なりとはいへ、誠に殘念であると言はれた。そこで自分はまた高崎翁の下に走つて、委曲を盡して自ら揣らざる罪を謝し、もう此の上は先生に何とか御工夫を乞ふより外はないと申した所が、翁は一晩よく考へてみやうと申されたから、翌朝また翁を訪ねると、翁は破顏一笑、やつと氣が付いたがこれは何でも無い事であつた、自分は御維新當時に於て、既にこの命を　陛下に捧げ奉つたのであるから、寧ろ今日まで餘生を保つ事を得て、天寵を辱うするのが不思議な位である。只この白髮首を召される事を覺悟したならばいと易い事であるから、貴公達は直に御製の中から御加點の分を百首位づゝ三通り拜寫するやうにといはれたので、自分は實に狂喜せん許りに喜び、御歌所に出仕して同僚鎌田正夫と共に時を移さず拜寫し終つて、これを翁に差し出すと、翁はこれを一通は田中宮內大臣に、一通は德大寺侍從長に、また一通は岩倉侍從職幹事に差出だされて、更に添へて言はれるには、これはお上に申し上げて賜はつたのではないから、違勅の罪は自分の一身を以て御詫び申し上げて、決して貴卿方に御迷惑は懸けぬ、けれども斯かる事をするといふことだけは御承知置きを願ひたいと申されて、それから天下の報道機關たる新聞雜誌社等の乞ふがまゝに授けられたのであ

つた。かくて引續き御洩らしになつた御製の數は五六百首にも及んだであらう。今日一般人士が等しく拜誦して感銘激勵しつゝある所のものは、これ全く高崎翁が決死の御蔭であるといつてもよいのである。當時伊藤公の如きは、餘りに數多の御製が新聞雜誌等に上掲せられるのを見て、潛かに高崎翁に向つて、實に有り難い事ではあるが一時に多數を御洩らし申しては却つてお目に止るやうな事になりはせぬか、若しさある時に於てはいかなる御咎めがあるかも知れないから、寧ろ少しづゝ折を見て御洩らし申し上げたならば、と忠告せられたが、翁は既に覺悟の前であるから、何時如何なる勅諚を拜するかも知れないと思へばこそ、一時も早く一首でも多く臣民に知らせて置きたいと思ふ心には、一身を顧るの暇もない、一旦勅諚を拜すればまう最後であると答へられた。何たる壯烈な意氣であらう。併しながら　明治天皇の仁天の恩、遂に何等の御咎めも無かつたのである。

御製を御洩らし申し上げることは斯くまでに至難な事であつた。從つてもしこの時に高崎翁が無かつたならば、高壯雄大にして深遠莊重、縹渺たる神韻の裕かな　明治天皇の御製を何時拜することが出來たか、蓋し測ら知る事が出來なかつたのである。

至仁至孝なる　今上陛下に於かせられては、夙に茲に御軫念あらせ給ひ大正五年に　明治天皇の御製御編纂の　勅命あらせられて、御歌所にその臨時編纂部を設けられ、御歌所長人江子爵を部長として、自分もその委員の一人に參加するの光榮を荷うたのであるが、爾來四年の後卽ち大正八年末に至つて御編纂は完成上奏を遂げたのであつた。抑もこの御事業といふは、これ一は　明治天皇の御德を永く後代に留め、億兆にいや深き大御心を傳へさせ給はんことを謀らせられ、一はまたその御製を以て明治鴻猷の源叢たることを御記念遊ばされやうとする　今上陛下の御孝道の叡慮と拜

察し奉るのである。實に　明治天皇の御製は、日常の御感想を有りの儘にお述べ遊ばされたものであるから、眞の勅語はこの御製であると申し上げても宜いのである、而してその總括せられて御文章となつて現はれたのが卽ち教育勅語その他の詔勅である。さればこの細かい御製を拜してから詔勅を拜しても、また詔勅を拜してから御製を拜しても、何れよりするもその間に寸毫の差も無いのであることは、特に注意して服膺しなければならぬ所である。國家の經綸も、一身の練磨も一に茲に基くべきものであることを忘れてはならぬ。のみならず進んでは世界人類に、無二の大經典たる事を知らしめなければならぬと思ふのである。

本年は　明治天皇の御昇天後はやくも十年。宮中にても伏見桃山御陵におかせられても意義ある御式年祭を擧げさられたるに際し、特に　今上陛下の深い思召によつて明治天皇の御製を御下賜になつたのは、これ聖代の

御美事として、臣民の相倶に感銘し奉る所である。而してこの機に於て大阪毎日新聞社に於ては、この昏けない大御心の一部分にても早く普ねく我が同胞に知悉せしめやうとして、特に自分にその謹解申し上げるやうにと委囑慫慂せられたが、自分は御歌所にこそ奉仕して居るが、この尊い御製を御註釋申し上げる事は、賤陋の身の到底能くする所では無いのみならず未だ嘗て斯かる事に從つた驗しも無いから再三辭退したのであつたけれども、强つての事で、今は辭するに由なく、これを承諾したのであるが、何等の力はないながらも、決して漫然これを引受けたのではない。國家を忘れ、忠孝を忘れ、上下を通じて混亂の極に達した現今の思想界を救はんとする同社の意氣を諒とした爲である。而して今その一首々々を拜書して行くうちに、今更ながら　明治天皇を追慕し奉るの情に堪へず、而も御製毎に緊切なる御聖訓の含まれてあるのを拜しては、感涙滂沱として、不覺に

も幾度原稿用紙を濡らした事であらう。而も自分は元不才の質、意到つて筆到らず、加ふるに謹解の日時が僅々數日を與へらるゝのみにて、殆んど再校再讀の餘地すら無い位であつたから、爲めに畏こき大御心の萬分の一をも、寫し奉ることの出來ないのは誠に恐懼措く所を知らざる次第である本書を繙かん人、願はくは不文の故を以て、斷じて偉大なる　明治天皇を累はし奉ることなかれ、今謹解を終つて、茲に感激の筆を擱くに當つて、若し聊かにても、尊嚴を冒瀆し奉るやうな事があつたならば只々萬死を以て拜謝し奉るのみであると爾か云ふ。

大正十一年　　明治天皇御十年式年祭の年八月中院

千葉胤明　謹みて識す

明治八年四月四日徳川昭武侯邸宅に御行幸の節
同侯に賜はりし御宸筆（徳川侯爵家秘蔵）

花くはし櫻もあれど此やどの
世々のこゝろを我はとひけり

『謹解』 美くしい櫻の花もあるけれども朕はこの家の代々の忠勤を嘉して輦を駐めたのである。

水戸德川氏は所謂三家の一であつて、往時幕府親藩中尤も重きをなしてゐた、光圀卿夙に大義名分を重んじ、尊皇の志篤く、大日本史を編纂するや、意を義分に用ゐ、頗る舊史の遺を補うた、蓋し維新以前にあつて、勤王思想の發達に多大の影響を與へたものである、爾來闔藩上下

學を尙び、節を重んじ、毅然たる藩風を成すに至つた。

齊昭卿亦父祖以來の風を承け、襲封の初め大に藩政を釐革し、率先して文武の道を奬勵した、嘉永の末、米艦我が邊境に來つてより、物情騷然、國事漸く多難の時に際し、夙に勤王の大義を唱へ、大に幕府の擅恣を責められた、當時東西勤王の志士は皆仰いで望みを卿に繫いだのである、處が反つて幕府の忌む所となり、遂に幽屏の裡に薨ぜられた、が大政維新の關鑰は實に水戸藩の手によつて開かれたものと謂ふべきである。

明治天皇は幕末國家多事の際に登祚あらせられ、王政維新の大業を成し遂げさせ給うたのである、御東遷の後、御政務の御暇には時々功臣勳舊の邸に臨幸あらせられた、向島小梅の德川邸に臨幸あらせられたのは、實に明治八年四月四日である、時に當主は昭武侯で、齊昭卿の令孫に

當る人であつた、德川家では光圀齊昭兩卿の書畫其の他貴重なる家什を陳列して天覽に供し奉り、又邸前隅田川には漁船數十艘を泛べ、投網せしめて叡覽に供し奉つた。

この御製は、實に此の臨幸に際して遊ばされたもので、越ねて同月九日特に昭武侯を宮內省に召して御下賜あらせられたのが、卽ち此の御短冊である、陛下が國家功臣を思召し給ふの厚き、獨り德川家の光榮たるのみならず、國民の齊しく仰ぎて盛德に感泣し奉る所、二卿の英靈も泉下に感激し居らるゝであらう。

明治十二年八月十八日右大臣岩倉具視公邸宅に
御行幸の節同公に賜はりし御宸筆（岩倉公爵家秘藏）

かぎりなくかけ連れたるともし火の

うつるも涼しにはのいけ水

『謹　解』　庭の木蔭に數多くかけならべた提燈の光りが池の水に映つて一層涼しさを添へる。

岩倉具視公は縉紳の家に生れ幕末多艱の際に處し、朝に在つて常に一頭地を抜くの才器を示し爲に反つて當時急激なる處士等の爲に誤られ、遂に寃を以て幽屏縮衣の身となり、京北岩倉の陋廬に蟄居すること五年、苦節を忍び、潛かに天業の挽回を策するに努められた。

慶應中に至つて幕府の威令全く地に墜ち、勤王の志士は當さに機を以て幕府を倒し、至尊親政

の聖代に復せんことに努力するの時期は既に來つた、公は此の機に於て大に經綸を立て、當時西竄中の三條實美公等と相呼應し、勤王雄藩をして連衡せしめ、遂に維新大業を輔翼し奉つた、公は實に明治維新元勳中、第一人者である。

王政維新の大業既に成るや、公挺身皇室國家の爲に奉じ、聖代百制の基礎、殆ど公が世に在るの間に之を成した、明治天皇亦深く公を信賴し給ひ、明治十六年公病篤きに及ぶや、儀衛の整ふを待たせ給はず、急に其の第に幸し、公の褥室に臨みて親く病患を問はせ給ふた如き、彼の天智天皇が大化の元勳藤原鎌足公の邸に幸して其の疾を問はせ給ひしと、古今對比し奉りて、我が國史上特筆し奉るべき二大美事と稱し奉るべきなり、明治天皇が功臣勳舊を待たせ給ふの厚き、又特に公を親信し給へるの厚き、此の一事を拜して既に明らかである。

明治十二年八月十八日烈暑の際、陛下には公の感に行幸あらせられた、公は能の業を催して慰奉り、黄昏御膳を獻つた、陛下には龍顔殊に麗はしく、乃ち御製一首を賜つた即ち此の御短冊である。

御製集刊行に付宮内省御歌所長子爵入江爲守氏
より特に本社に寄せられしもの

維訓雅誥

壽爲守

明治天皇御製集

御歌所寄人　千葉胤明謹選

目次

我國は神のすゑなり神まつるむかしのてぶり忘るなよ夢……一
國民はひとつこころにまもりけりとほつ御祖の神のをしへを……二
上つ世のみ代のおきてをたがへじと思ふぞおのがねがひなりける……三
いそのかみ古きためしをたづねつつあたらしき世の事もさだめむ……四
よきをとりあしきを捨てて外國に劣らぬ國となすよしもがな……五
國のためいよいよはげめ千萬の民もこころをひとつにはして……六

うつせみの世のため進むいくさには神も力をそへざらめやは……六
神路山みねのまさかきこの秋は手づから折りてささげまつらむ……七
目にみねぬ神のこころにかよふこそ人の心のまことなりけれ……九
ためしなく開けゆく世を見ることも導く神のませばなりけれ……九
千早ふる神ぞしるらむ民のため世をやすかれと思ふこころは……一〇
わがこころおよばぬ國の果までも夜晝かみは守りますらむ……一一
國民のひとつこころに仕ふるもみおやの神のみめぐみにして……一一
あしびきの山田の庵の竹ばしらかたぶくばかりつもる雪かな……一二
ともすればうきたち易き世の人のこころの鹿をいかでしづめむ……一三
ふる雪や袖にはらひて臣ぞもと馬はしらする今日のたのしさ……一三
世は安くをさまりぬとて世の人のゆるふこころぞ仇となるべき……一四

あしびきの山のはいづる月影におほうなばらの波を見るかな……一五
くろがねの的射し人もあるものを貫きとほせやまとだましひ……一五
萩の戸の露にやどれる月影はしづが垣根もへだてざるらむ……一六
たらちねのみおやの御代の故事を思ひぞいづる庭のたちばな……一六
水こねし里のしめりけ乾くべく秋のみ空よはれつづかなむ……一七
あさな〳〵かならず來鳴く鶯をききもらしけり事しげくして……一八
富士の嶺に初雪みねてうちひさす都もさむき秋風ぞ吹く……一八
すがのねの長き春日ぞなかなかにものに怠る人ぞおほかる……一九
むちうたば紅葉の枝にふれぬべし駒をひかへむ岡ごねの道……一九
たちつづく市の家居はあつからむ風のふき入る窓せばくして……二〇
夕つく日かげろふ杜の木がくれにひぐらし鳴きて秋風ぞ吹く……二一

時のまにすゞりの水のかわくにも今日の暑さのしられけるかな……二一
このゐ人かたらふ聲もたゆはててふけゆくよはに水鶏なくなり……二二
庭のおもに清水のおとはきこゆれどむすぶ暇もなき今年かな……二三
つばめ飛ぶかげのみみにて田植時いへに人なき小山田の里……二三
軍人いかなる野べにあかすらむ蚊の聲しげくなれる夜ごろを……二四
夏の夜もねざめがちにぞあかしける世のため思ふ事おほくして……二五
重荷ひくくるまの音ぞきこゆなる照る日の暑さたへがたき日に……二五
朝の間にものまなばせよをさな兒も晝はあつきに倦みはてぬべし……二六
わたの原おひてをうけてゆく舟の片帆にかかるゆふだちの雨……二七
はらはずば思はぬかたにかたぶかむ露おきあまる撫子の花……二七
磯菜つむをとめが聲ぞきこゆなるなぎさの松のかすみがくれに……二八

てるにつけ曇るにつけて思ふかなわが民草のうへはいかにと……二九
あかつきのねざめしづかに思ふかなわが政事いかがあらむと……三〇
秋の夜の長きにあかす燈火をかかげて文字をかきすさみつつ……三〇
桐火桶かきなでながら思ふかなすきまおほかるしづが伏家を……三一
ふくる夜の霜むふ人もあるものを火桶にのみやよりあかすべき……三二
家富みてあかぬことなき身なりとも人のつとめに怠るなゆめ……三二
鬼神も泣かするものは世の中の人のこころのまことなりけり……三三
天をうらみ人をとがむる事もあらじわが過を思ひかへさば……三三
並びゆく人にはよしやおくれもただしき道をふみなたがへそ……三四
とる棹のこころ長くもこぎよせむ蘆間の小舟さはりありとも……三五
人はただ誠の道をまもらなむたかきいやしきしなはあれども……三六

さしのぼる朝日のごとくさわやかにもたまほしきは心なりけり……三七
たらちねの親のこころは誰もみな年ふるままに思ひしるらむ……三七
あさみどりすみわたりたるおほ空のひろきをおのが心ともがな……三八
いつくしとめづるあまりに撫子の庭のをしへをおろそかにすな……三九
わけばやと思ひ入りぬる道にしも高きしをりの見ねそめにけり……三九
つかさ人ささぐるふみはおほかれど花見るほどのひまはありけり……四〇
あつしともいはれざりけり煮ねかへる水田に立てるしづをおもへば……四一
子等はみないくさのにはに出ではてて翁やひとり山田もるらむ……四二
むらきもの心をたねのをしへ草おひしげらせよやまと島根に……四三
ことそぎし昔の家のつくりさまいまも田舎にのこりけるかな……四三
言の葉のまことの道を月花のもてあそびとは思はざらなむ……四四

なつしらぬ氷水をばいくさ人つどへる庭にわかちてしがな……四五
すゑつひにならざらめやは國のため民の爲にとわがおもふこと……四六
ひさしくも我飼ふ駒の老いゆくか惜しきは人にかはらざりけり……四六
しづがすむ蘆家のさまを見てぞおもふ雨風あらき時はいかにと……四七
おもふこと思ふがままに言ひいづる幼心やまことなるらむ……四八
思ふことおもふがままになれりとも身をつつしまむ事な忘れそ……四八
そのもりやひとり見るら む昔わがあつめし庭の秋草のはな……四九
ものまなぶ道にたつ子よおこたりにまされる仇はなしとしらなむ……五〇
あだし野にいざかがやかせ益荒雄がとぎすましたる太刀のひかりを……五〇
思ふことつくろふことも まだしらぬをさな心のうつくしきかな……五一
つく杖にすがるともよし老人の千年の阪をこゆよとぞおもふ……五二

つたへきて國のたからとなりにけり聖の御代のみことのりぶみ……五一
庭草にみづそそがせて月をまつなつのゆふべは思ふことなし……五三
年年におもひやれども山水をくみてあそばむ夏なかりけり……五四
なにがしの寺の文字ある古瓦たまにならべてかざりけるかな……五五
兵士のかてもまぐさもはこぶらむ牛もいくさの道につかへて……五五
種なくて繁りも行くか世の中の人の心の物忘れ草……五六
うちのりて雪の中道はしらせし手なれの駒もおいにけるかな……五七
にひばりの畑も田面もおほけれどひなは荒野のなほ廣くして……五七
まきばしらたちさかゆるも動きなき家の主人のあればなりけり……五八
國といふ國の鏡となるばかり磨けます荒男やまとたましひ……五九
大空にそびねて見ゆる高嶺にものほれのほるみちはありけり……六〇

岩が根のここしき山を照る日にもたゆまずこゆるわがいくさ人……六一
やすくしてなし得がたきは世の中の人の人たるおこなひにして……六二
いさをある人を教へのおやにしておほしたてなむ大和撫子……六二
目に見ねぬ神にむかひてはぢざるは人の心のまことなりけり……六三
世の中にひとりたつまで修め得し業こそ人のたからなりけれ……六四
いかならむ事にあひてもたわまぬはわが敷島の大和だましひ……六五
池水に小舟うかべて遊びつる昔戀しきふるさとの庭……六六
敷島の大和心のををしさは事ある時ぞあらはれにける……六七
ともすればあらぬ方にと踏み迷ひ教へ難きは人の道なり……六八
たらちねの親の教へを守る子は學びの道もまどはざるらむ……六八
ただしくも生もしげらせよ教草をとこ女の道をわかちて……六九

いかならむ藥あたへて國のためいたでおひたる人をすくはむ……七〇
うつはには從ひながら巖がねもとほすは水の力なりけり……七〇
幼子がならへばならふほどみにてきよくなりゆく水くきのあと……七一
うけつぎし國の柱のうごきなくさかにゆく世をなほいのるかな……七二
おのが身を修むる道はまなばなむ賤がなりはひいとまなくとも……七二
はなちたるまきの若駒いづれをかわがうまやにはひかむとすらむ……七三
つかさ人まかでし後の夕まぐれこころ靜かに書をみるかな……七四
山のおく嶋のはてまで尋ねみむ世にしられざる人もありやと……七四
いまはとて學びの道に怠るなゆるしのふみを得たるわらはべ……七五
千萬の民よ心を合せつつ國に力をつくせとぞおもふ……七六
蘆原の國とまさむとおもふにも青人草ぞたからなりける……七六

したはしと思ふ心やかよひけむむかしの人ぞ夢にみにける……七七
うしろにはいつなりにけむ潭ぐ舟のゆくへはゐかにみへし島山……七八
くもりなき心のそこのしらるるは言葉の玉のひかりなりけり……七八
かぎりなき世にのこさむと國のためたふれし人の名をぞとどむる……七九
たらちねの親のみまへにありとみし夢のをしくもさめけるかな……八一
暇あらばふみわけて見よ千早ふる神代ながらの敷島の道……八二
おとろへしさまはみにねど老人の涙もろくもなりまさるかな……八三
あやまちを諫めかはして國のため力をつくせますらをのとも……八三
をりをりに思ひぞいづる國のため心くだきし人のむかしを……八四
事なしとゆるぶ心はなかなかに仇あるよりも危ぶかりけり……八五
ささやかに見ゆる家居もかたつむり一人すむには事たりぬべし……八五

つもりなば拂ふかたなくなりぬべし塵ばかりなる事と思へど……八六
國のためあだなす仇はくだくともいつくしむべき事な忘れそ……八六
言の葉の花のいろこそかはりけれおなじ心のたねと聞けども……八七
さざれさへゆくこころして山川の淺瀬の水のはやくもあるかな……八八
さかしきも愚もあれど人ごとにあらまほしきは誠なりけり……八八
むらきもの心つくして報いなむおふしたてたる親のめぐみに……八九
村肝のこころをひろく養はばながき齢もたもたざらめや……九〇
わが庭のおほきのかげは風涼し山にひとしと人のいふまで……九〇
はまごのの庭の池水あさしほのみちたるうへにちる櫻かな……九一
國のためたふれし人を惜しむにもおもふは親のこころなりけり……九二
弓矢もて神のをさめし我國にうまれしをのこ心ゆるふな……九二

○國をおもふ道に二つはなかりけりいくさのにはにたつもたたぬも……九三
おのがじしつとめををへし後にこそ花のかげには立つべかりけれ……九四
たらちねのみおやの御代に仕へにし人もおほかたなくなりにけり……九四
あやまちをいさめかはして親しむがまことの友のこころなりけり……九五
たらちねの親のこころをなぐさめよ國につこむる暇ある日は……九六
おもふことありのまにまにつらぬるが暇なき世のなぐさめにして……九六
眞心をうたひあげたる言の葉はひとたびきけばわすれざりけり……九七
こころある人のいさめの言の葉はやまひなき身のくすりなりけり……九七
たらちねのみおやのみやにをさなくてみしよこひしき月のかげかな……九八
旅ねするやどの軒端のあさければ枕の上に月のさしくる……九九
都にておもひしよりもおもしろしあがたの里の秋の夜の月……九九

夏の夜の月の桂のなり所涼しき風のいかに吹くらむ……一〇〇
霧たちてさだかに見ねず路のべにわれをむかふる人のおもわも……一〇二
ここのへの庭も野分にあれにけり賤が伏屋はいかにかあるらむ……一〇三
うたゞにはつらなりがたき老人にをりてをやらむ庭のしら菊……一〇四
白菊の花ときみちてあしたづの羽かぜもかをる園のうちかな……一〇五
夕日かゞてらすを見れば小倉山松より奥ももみぢなりけり……一〇六
もみぢ葉のあかき心をやす國の神のみたまもめでて見るらむ……一〇七
なく蟲の聲もまじりて更くる夜の枕にさむき水の音かな……一〇七
しまじまもさやかに見ねてかがみなすあをうなはらに秋の風吹く……一〇八
ことしゞきこの秋にしも千町田のみのりよろしと聞くがうれしさ……一〇九
春風の吹かぬあしたに散る花も木かゞにのみはとまらざりけり……一〇九

春雨の降る日しづけき庭の面にひとりみだれて散るさくらかな……一一〇
さきつづく花より花にあくがれて蝶も夢見るひまやなからむ……一一一
棚ゆひて外にうつさむ藤の花かかれる松はいたく老いたり……一一二
吹上のそのふの花をいかにぞと問ふ日もなくて春の暮れ行く……一一二
舟ならで行きかひすべく見ゆるかな霞のうかぶ淡路しま山……一一三
子を思ふきぎすの聲をあはれとはかりを樂しむ人もきくらむ……一一四
おやも子もうちつどひてや隼人ことしは家の花を見るらむ……一一五
月かゞはかつ見ねながら春雨のしづくぞおつる花の下みち……一一六
しゞりあひて木のしたくらき夏の夜は月のためにも風ぞまたるる……一一六
おくしもの寒さを知らぬ夏菊の花もうつらふ時はのがれず……一一七
風わたる山した水にただよひてすずしく見ゆるうきぐさの花……一一八

生垣のかなめのうへに咲きながら根ざしは見ねぬひる顔のはな……一一八
雲ばかり空にまよひてゆふだちのふりいでぬまの暑くもあるかな……一一九
ゆふべゆふべすずみの庭に立つこともことなきときにあへばなりけり……一二〇
國のため身をかへりみぬますらををあまた得にけりこの時にしも……一二一
ゆふだちの雨は高根をこねにけり並木の松に風をのこして……一二二
冬ふかき池の中にもほとばしる水ひとすぢはこほらざりけり……一二二
文机にかざれる玉の光りまで寒くぞ見ゆる霜さゆる夜は……一二三
木枯の吹きはらしたる大空に遠山見ねて夜は明けにけり……一二四
みじかしと思ふ心に冬の日はなかなかものはかざりにけり……一二五
人皆のおぞろき顔にをしむかなにはかに暮るる年ならなくに……一二五
ふりつもる雪をしのぎて咲く梅の花はいかなる力あるらむ……一二六

まさたたく夜あらしさむく埋火のうへにも霜のちるここちして……一二七
埋火のもとにいざなへふる雪のはれまもまたできたる老人……一二八
ふきおろす峰のあらしに山里はきのふの雪ぞけふもちりくる……一二八
庭しろくみゆるは月の光りにて雪は早くも降り止みにけり……一二九
めづらしと思ひもあへずとけにけり霜よりうすきけさのはつ雪……一三〇
いそ山をはなるる月に聲をのみききし千鳥の影も見ねつつ……一三一
ありとある人をつぎへて春ごとに花のうたげをひらきてしかな……一三二
神風のいせのみやゐををがみての後こそきかめ朝まつりごと……一三二
のる駒に小草はませてやすらへばくらのうへしろく花ちりかかる……一三三
舟うけてむかしあそびしふるさとの池にや月のひとりすむらむ……一三四
すすみゆく世に生れたるうなゐにも昔のことは教へおかなむ……一三五

おのが身はかへりみずして人のためつくすぞ人の勤なりける……一三六
世の人を教ふることも難からむ身のおこなひのただしからずば……一三七
なすことのなくてをはらば世に長きよはひをたもつかひやなからむ……一三七
しる人の世にふるほどにさだめてむ古きにならふ宮のおきてを……一三八
この秋はいかなる野邊にたびねしていくさならしのわざをみるべき……一三九
あけがたの霞のうちにいつとなくきにゆく月のかげのしづけさ……一四〇
山ちかくすみし都をなつかしとさらにぞ思ふ夏のきぬれば……一四〇
大空のほしのはやしもうごくかと思ふばかりに木枯のふく……一四一
かれがれになりぬる庭のむしのねはなかぬ夜よりもさびしかりけり……一四二
おのづからわが心さへやすからずこなりの國のさわがしき世は……一四二
思はざる事のおこりてよのなかは心のやすむ時なかりけり……一四三

わらはべがつくりあげたる雪の山たかきいさををたれとさだめむ……一四四
まうでむと思ふ社をよそにみてすぐるたびぢのをしくもあるかな……一四五
あきのよのながきをなにかこつらむなすべきことのおほくある世に……一四六
かき根行く水にひびきて松風の音も流るる山の下庵……一四六
すなほにてををしきものは敷島の大和言葉のすがたなりけり……一四七
やすくしてなしに難きは世の中の人の人たるおこなひにして……一四八
さまざまにもの思ひこしふたとせはあまたの年を經しここちする……一四八
宇治川の河上とほく霧はれていはまの道もみゆる月かな……一五一
おもほにず夜をふかしけり國のためたふれし人のもの語して……一五一
里とほき山田の早苗うゑはててかへる月夜やすずしかるらむ……一五二
戰のために力をつくしつる民のこころをやすめてしかな……一五三

かきつばたにほへる池はかけわたす橋こそ花のたにまなりけり……一五四
ことしあらばわがちからともたのむべき人のをしくも老いにけるかな……一五四
霜のうへにうつる枯木の影きにていまはとしらむありあけの月……一五五
國民のうへも心にまかせぬは雨とあらしのうれひなりけり……一五六
むつまじく枝をかはしてさく梅もさかりあらそふ色ばみにけり……一五七
千萬の民のこころもをさまらむ誠ひとつをとてをしへなば……一五七
逢阪の關のふるみち春ゆけば杉生かすみてうぐひすぞ鳴く……一五八
わがために心つくして老人が敎へし事は今も忘れず……一五九
世の中にあやふき事はなかるべしただしき道をふみたがへずば……一六一
いづる日の光もそひて山ざくらまばゆく見ゆる花のいろかな……一六二
たたかひのかちに誇りて村肝のこころゆるぶなわがいくさ人……一六二
ことしあらば火にも水にも入りなむと思ふがやがて大和魂……一六三
わたごのの下ゆく水のおときくも今宵ひと夜となりにけるかな……一六四
わが心われとをりをりかへり見よしらずしらずと迷ふことあり……一六五
若竹のしげみもりくる月影はくまなきよりもすずしかりけり……一六六
ひろき世にまじはりながらともすれば狹くなりゆく人ごころかな……一六七
春風にいななく駒のこゑすなり花のした道たれかゆくらむ……一六八
思ふこと思ひさだめて後にこそ人にもかくといふべかりけれ……一六九
厚氷とぢたる池の底までもてりとほるかとみゆる月かな……一六九
千歲にはあにずともよし常盤なる松のみさをにならひてしかな……一七〇
白川の關うちこにて見しかげも思ひぞいづるあきの夜の月……一七一
いしだたみかたきとりても軍人身をすてててこそうち碎きけれ……一七二

杉垣をめぐりてみれば山里はおもはぬかたに門ぞありける……一七二
竹馬にこころの乗りて手習におこたりしよをいま思ふかな……一七三
なかなかに風のたゝたるよはにこそおつる木葉のおとはきこゆれ……一七四
うつせみの代々木の里のなりぎころ花のこずゑも苔むしにけり……一七四
むらきもの心のかぎりつくしてむわが思ふことなるもならずも……一七五
のぼりきて窓をあくれば鶯もたかきにうつる聲きこゆなり……一七六
ことなくて治まる代にも民のため思ふこころはやすむ時なし……一七七
このあさけひと村雨やふりつらむ樅のわか葉につゆのたまれる……一七八
遠山の雲もうごきて秋の野の茅原かやはら風わたるなり……一七八
さみだれに疊のうへもしめれるをたむろのうちぞ思ひやらるる……一七九
園のうちにうゑたる稻もいろつきぬ里人いまか山田かるらむ……一八〇
咲く花を宿にのこしてしづのをは長き日ぐらし小田にたつらむ……一八〇
堤ゆく人影たゝてすみぞめの夕霧くらし寺島のさと……一八一
霧はらふ翅のおともきくばかりまぢかき空をわたるかりがね……一八二
月の影ふまむと思ふ淺茅生にみちてきこゆる蟲のこゑかな……一八三
早苗とるこゑぞにぎはふたたかひにいでにし民も里にかへりて……一八三
ありあけの月の雫をはちす葉のうへにのこして夜はあけにけり……一八四
はたたがみ光きらめく夕立に蔀おろせといひさわぐなり……一八五
かたはらに眠るうなゐは夏草を刈るしづの女がうまこなるらむ……一八五
いはほきる音もしめりて春雨のふる日しづけき白川の里……一八六
いつはらぬ神の心をうつせみの世の人皆にうつしてしがな……一八七
めづらしきこの初聲をほとときす多くの人にきかせてしがな……一八八

春の野にむれてあそべる若駒を庭にはなちてみまほしきかな……一八八
花の影ふむ人もなき故郷のおほろ月夜やさびしかるらむ……一八九
のぼり來て窓を明くれば鶯もたかきにうつる聲きこゆなり……一九〇

（目次終）

明治天皇御製集

御歌所寄人　千葉胤明謹選

我國は神のすゑなり神まつる
むかしのてぶり忘るなよ夢

『謹解』　そもそも我大日本帝國は天神の御末である、されば神を祭る昔のならはしを忘れてはならぬ。ゆめ忘れてはならぬ。

「忘るなよゆめ」と調を強くあそばした處に千鈞の重みがある。こは敬神崇祖の大本を御教へあそばされた重きが中にも重き御製で、畏げれど　陛下の御訓戒は一として御自の躬行實踐の後ならぬは

無い。この御製の御主旨、卽、然りであつて、　陛下には御神祭を　最御大事にあそばされた。御祭祀が御政事の大本であると云ふ深厚なる御信念があらせられたからであらうと拜察せられる。

四方拜を初め定まれる御祭日には神殿の御親祭を始め奉り、伊勢に御親謁あらせらるゝは申迄もなく、官國幣社に對せられても勅使又は奉幣使を御遣しになつてその範を御示になつた。吾が帝國の臣民たるもの報本反始の大本を忘れて何の道義があらう。この　聖旨を奉體せずして何の臣道があらう。

國民はひとつこころにまもりけり
とほつ御祖の神のをしへを

『謹解』　我國民は同心一體となつて皇祖皇宗の御遺訓を克く遵奉して居る、あゝたのもしき事である。

卅七年戰役中の御製にて大日本帝國臣民が一致團結して克く君國の爲に力を盡すことを御滿足におほしめされたのである。皇謨の興張は國民の一致協力して皇祖皇宗の遺訓を遵奉するにありとは實に陛下の御信仰であつたのである、この大御心を心として互に相扶け相親みて君國の爲めに盡すことを忽にしてはならぬ。

上つ世のみ代のおきてをたがへじと
思ふぞおのがれがひなりける

『謹解』　皇祖皇宗の御代に御定めになつた御遺訓を違へまいと思ふのが朕の望である信念である。

カミツヨは「上の世」卽上代の事、掟は「おきつる事」であつて法則、法度こゝにては御遺訓、御遺制と解し奉るべきである。萬世一系の皇統連綿として窮無く、國民一致して　天皇の聖德を奉じ、世界無比の國體を成し、いやがうへにも繁榮する所以は、天孫降臨に際し　皇神天照大神が寶鏡を御親授になつて「この鏡を見ること朕を見る如くせよ」と宣ひしより以來、代々の　天皇が　皇

祖皇宗のこの國を治め給うた大御心を以て大御心とせられ、大孝を申べ給ひしによりて、忠孝仁義が治く國民精神の基礎となりしに由ること、信ずるのである　陛下にはこの御遺訓を違へてはならぬとの深き思召を以て、日夜大御心にかけさせ給ひて「それが朕のねがひである」と仰せられたのである、畏しともかしこき大御心である。

いそのかみ古きためしをたづねつつ
あたらしき世の事もさだめむ

『謹解』　古き慣例を尋ね求めて十分に研究した上で新しき制度を定めてゆかう。

イソノカミは古きの枕辭、何事も好んで新しきを迎ふるが人情の常ではあるけれど　皇祖皇宗のあそばされた尊き御先例をよく明かにしてさて後、一國の事にも又一家の事にも新味の應用が肝要であると云ふ温故知新の御訓戒を拜誦せられる、最、深遠なる聖慮をよく遵奉せむには、よく帝國の國體を研究し輕佻浮華の惡風に靡かずして帝國臣民たるの軌道を進むべきである。

よきをとりあしきを捨てて外國に
劣らぬ國となすよしもがな

『謹解』　諸外國の制度文物の長所を採り用ゐ短所を斥け捨てゝ、我國をそれ等諸外國に決して劣らざる國とするすべがあつてほしい。

この御製の思召を具體的に立證するに有難き御逸話がある、故大久保内務卿が長與衛生局長が歐米を視察したる肉食本位の報告を得てそのまゝ　陛下に言上するをきこしめして仰せらるゝには泰西の衛生狀態はよく了解せり、併し、我國三千年の歴史を見るに穀食を常習とするにも關らず、古來長壽を保ちし者決して乏しとせず又腦力に於ても一例を云はゞ千歳の後迄世人の信仰衰へざる僧侶空海、傳敎の如きは末世の墮落僧と同一視すべくもあらず、必、穀食のみを厲行して敎義の普及にはあらゆる强敵と戰ひ遂に打ち勝つ智力と體力ありしを疑はず、果して然りとすれば肉食の民のみを優秀なりとは信ずべからず、加之、國土の位置、氣候、人種の如何等も考慮し確證を得て改むべきは改め

よ輕擧は害ありて益なしこの御沙汰に流石の大久保も恐懼措くところを知らず流汗背を濡して、御前を退下し後日大山巖、高崎正風の兩氏に語りて自己の輕率を後悔されたと云ふ。

國のためいよいよはげめ千萬の
民もこころをひとつにはして

『謹解』 七千餘萬の臣民よ汝等がその心を一つに固めていよ〳〵國家の爲に竭せよ。

こは「國民の力のかぎりつくすこそ我日の本のかためなりけれ」の御製と同じく國民の擧國一致を勵し給うた御製と拜誦される。 陛下の大御靈は今も昭に七千萬の臣民の行動をみそなはしておはしますからこの御遺訓を奉體して、力めて 今上陛下の御世に奉仕する事を忘れてはならぬ。

うつせみの世のため進むいくさには
神も力をそへざらめやは

『謹解』 天下の正義の爲、世界の人道の爲に進軍する我軍隊には神も力を添へずにあらうや 疑もなく神の御助勢がある。

ウッセミは「世」の枕辭、ソヘザラメヤハは「添へないで居るものか屹度添へられる」と云ふ强い詞、こは宣戰の詔勅を御發布になつた三十七年の御製で御武威が滿ち滿ちて御確信のほど伺ひ奉るもかしこし。

神路山みねのまさかきこの秋は
手づから折りてささげまつらむ

『謹解』 神路山（伊勢）の峰の眞榊を今年の秋こそは朕が手づから折り取りて皇神の御前に捧げようぞ。

陛下の御威德に據り大戰役がめでたく終局を告げた三十八年の御製である、世界人道の爲の交戰の大目的をめでたく御達しあそばされ、 畏くも伊勢神宮に御親祭あそばされむとする、恐れながら御

得意の御龍顔をまのあたり拝し奉る如きこゝちする御製である、この御製に就て忘るべからざる御事實がある、小村全權大使は講和締結を了して歸朝する、海陸の軍隊は萬歳聲裡に堂々凱旋する、樞密院の耆老佐々木侯、東久世、佐野の兩伯、高崎男の人々　陛下の御威稜によりて擧國一致してこの凱歌を奏するに至れる萬々歳の事たるは申すまでも無けれど其間に宸襟を惱まし給ひたるは眞に恐察するだに畏き事であるを猶この上に玉體を煩はし奉るは恐れおほき事ながら有史以來の御大業であらせた御結果を伊勢神宮に御みづから御奉告をねがはしきものなりと密々に語りあひつゝある折柄十月の中旬頃の事と記憶す日々四十首宛高崎御歌所長に拝見を仰せ付けらるゝ御詠草中にこの御製あるを拝見するや御歌所長は、思はず膝を打ちて難有し必然この秋には御親謁あらせらるゝに相違なしとて内々上記の人々に拝誦せしめて御實現を祈り奉られたが果せる哉十一月十七日には御親謁の上、莊嚴なる御奉告祭を行はせられた、この御一事によりても　陛下が如何に躬行實踐の御天性であらせられたかを窺ひ奉る事が出來る。

目にみえぬ神のこころにかよふこそ
人の心のまことなりけれ

『謹解』　目にはみられぬ神明のこゝろに通ずるが人の心の誠である。至誠は神に通ずと古人も謂うてをる。この御製を拝誦しても「鬼神を泣かするものは」の御製を拝唱しても人道は卽、至誠に在りと云ふことをよく肝に銘せねばならぬ。平易にして而も人道の極致を示させ給へる聖訓である。

ためしなく開けゆく世を見ることも
導く神のませばなりけり

『謹解』　古にためしもなく開けた今日の世の中を見るのも皆、陰ながら護り導き給ふ神がまし

ますからである。

維新の大業を始めとして皇國の光が輝きわたつたのは皆　聖天子の極りなき御德である、限りなき御力である、然もそれを神明の加護に歸し給へる御謙德のほゞ實に畏き極である。

千早ふる神ぞしるらむ民のため
世をやすかれと思ふこころは

『謹　解』　萬民の爲に天下靜謐なれとわが朝夕思ふ心は天にいます神が一番よくしられるであらう。

千早振は神の枕詞、外には國威を伸張し內は臣民の安寧幸福を圖るを專念となし給ふ餘りには御避暑御避寒の御事も無きのみならず、夏の短夜も御寢覺めがちにあらせらるゝ御苦心のほゞを眞に御承知なさるのは目に見ねぬ神でいらせられると仰せられたこの一首を拜誦してよく聖慮を遵奉して君國の爲に心身を勞する人、幾何あるかを思へば恐懼に堪へぬと云ふ外に詞が無い。

わがこころおよばぬ國の果までも
夜晝かみは守りますらむ

『謹　解』　國を思ひ民を思ふ我心の至らぬ處はないかと夜となく晝となく心にかけて居るがその我心のゝかぬ果までも國家鎭護の神々は必、明かに守つてくださるであらう。

國家國民の爲に日夜あらん限りの大御心を盡させ給ふが上に猶神明の守護を祈りたまふ御信仰あつき御製で殊に三十六年の御作であるから日露の關係刻一刻と險惡を加へつゝある時の大御心を拜察し奉れば感涙胸に溢れて言ふ所を知らず、かしこき極みにあらずや。

國民のひとつこころに仕ふるも
みおやの神のみめぐみにして

『謹解』 六千餘萬の臣民が一心になつて國家の爲に力を盡し朕に忠勤を抽づるも皆、皇祖皇宗の御遺德である。

「朕か德では無い」と云ふ御謙遜の聖旨が含まれてをる。聖明比なき 陛下におはしまして然もおんみづからの御稜威を仰せ給はぬ、涙こぼるゝばかりに畏き御製である。

あしびきの山田の庵の竹ばしら
かたぶくばかりつもる雪かな

『謹解』 さなきだにかよわき竹を柱なる山村の假庵が傾くほどに深く雪がつもつたいたはしき事よ。

アシビキノは山田の庵のヤマだけにかゝれる枕辭、景情兼ね備つた御製と窺ひ奉る。

こもすればうきたち易き世の人の
こころの塵をいかでしづめむ

『謹解』 何事につけても浮きたち易い今の世の人心を如何してしづめたならばよからうか。

現今の思想界のありさまは如何である、浮華ではないのか、輕佻ではないのか、眞面目と言へるか堅實と云はれるか、爲政者たる者、國民指導を以て任ずる人、この御製を拜誦して如何なる感がある。

ふる雪を袖にはらひて臣どもこ
馬はしらする今日のたのしさ

『謹解』 ふりかゝる雪を袖に打拂ひつゝ、馬を走らする今日はさて〳〵たのしきことである。

何と申す御勇壯の御製であらう、畏くも 陛下には斯くして御身心を御錬磨あそばし御乘馬の回數

は實に一年中に四百回以上にものぼらせられた事もあると承はつてをる、斯くてこそ空前の御大業を御成就あそばされたのであらうと拜察し奉る。

世は安くをさまりぬとて世の人の
ゆるふこころぞ仇となるべき

『謹解』 世の中がやすらかになつたとて弛みくつろぐ人心が仇となるものであるから油斷をしてはならぬ。

水も動かなければ腐るの習で、安心ほど人心を怠惰に導くものはない、恐るべきである。戰爭が終へて、やうやく天下の人心が安逸に流れかゝつた明治四十一年の御製である。戊申詔書は實にこの年の十月十三日に煥發せられた事を銘記すべし。

あしびきの山のはいづる月影に
おほうなばらの波を見るかな

『謹解』 今しも山の端をはなるゝ月の光に海原の波がきら〳〵輝いてみゐて心地よし。

アシビキは山の枕辭、雄大なる御着想、豪壯なる御格調、さしのぼる月光に銀波かゞやく大海原が眼前に展開する如く伺はれる。

くろがねの的射し人もあるものを
貫きとほせやまとだましひ

『謹解』 鐵板を射とほした人もあるではないか日本魂を貫徹せやしてどうするか。

精神一到何事か成らざらむの御教訓である「日本魂を貫徹せよ」何と云ふ御力のこもつた御詞で

あらう、國民たるものいやが上にも心身の鍛錬に努めて聖旨を奉體せなければならない。

萩の戸の露にやどれる月影は
しづが垣根もへだてざるらむ

『謹解』 萩の戸の露にうつくしく輝いてをる月影は片山里の賤が伏家の垣根にも變らぬ光を放つてをることであらう。

萩の戸は「萩の戸の花の下なるみかはみづ千年の秋の影ぞうつれる」など古歌にもみえて清涼殿の東西にある小萩垣であると云ふ、秋の夜の月をみそなはすにも「しづが垣根もへだてざるらむ」とあそばされた大御心のほど畏ききはみである。

たらちねのみおやの御代の故事を
思ひぞいづる庭のたちばな

『謹解』 庭の橘のかぐはしい薫をきくにつけても御父天皇の御在世の事どもが思ひ出されるらあなつかしい事かな。

タラチネはみおやの枕辭、橘の香は昔がしのばれるものである、薄月匂ふ南殿の御階にいでたゝせ給ひて内憂外患に御心をなやまし給ひし先朝のおん事を偲ばせ給ふみけしき、畏けれどもあたり拜する如きこゝちせられて尤なつかしき御製と拜誦せらる。

水こえし里のしめりけ乾くべく
秋のみ空よはれつづかなむ

『謹解』 洪水の爲に荒された田家の濕氣がはやく乾き果てるやうにこの快晴な秋日和が長くつゞけかし。

水コエシは洪水の爲に湛水せしを云ふ、シメリケは濕氣、罹災地の人民の衛生の事をおほしめしやらせ給へるいとも畏き御製と奉誦す。

あさな〳〵かならず來鳴く鶯を
ききもらしけり事しげくして

『謹解』 毎朝屹度庭に來て鳴く鶯の聲も事がおほくて聞きもらしがちである。
この一首を拜誦しても春眠不覺曉と云ふ春の朝もいかに早くより御學問所に出御ありて御政事を聞こしめされたかを伺ひ知ることが出來る。こは四十二年の御作にてこの年は大戰の後を受け民心の浮華に流るゝを嘆かせたまひて、前年の十月に戊申詔書をたまはりしを拜しても萬機御親裁の御多事なりしことを思ひやり奉られてかしこしともかしこし。

富士の嶺に初雪みえてうちひさす
都もさむき秋風ぞ吹く

『謹解』 遠く見わたす富士山の頂上にはや眞白く初雪が見ねて都のうちもやう〳〵寒い秋風が吹

いて來た。
ウチヒサスは都の枕辭、白銀の如き芙蓉峰頭の初雪、うらがれそめた都大路の街路樹のそよぎ、實に「秋風寒」と云ふ御題を崇高にあらはさせ給ひたる御作である。

すがのねの長き春日ぞなかなかに
ものに忘る人ぞおほかる

『謹解』 のどやかに日長い春の日はかへつて物事に倦み怠る人がおほからうぞ。
菅の根は「長き」にかゝれる枕辭、ナカ〳〵ニは「かへつて」と云ふ意である。「心せでやは」と云ふ御餘情のあるものと拜察するがよい。

むちうたば紅葉の枝にふれぬべし
駒をひかへむ岡ごえの道

『謹解』 岡のあたりの紅葉は美しい勇める駒に鞭うち進まば紅葉の枝にふれるであらう觸れたならばあたら紅葉が散り亂るゝであらう、しばらく駒の手綱をひかへて賞翫してゆかう。

紅葉色濃き丘陵に駿馬をとゞめさせ給へる御英姿を拜し奉るこゝちがする。秋期大演習の折などの御諷懷であらうか、湯の德禽獸に及ぶといふ事もあるが　陛下の御仁惠は一枝の紅葉を借みいたはらせ給ふにもその極りなき事が伺はれる、堂々たる馬上の御雄姿と露霜にもゐ堪へまじき紅葉との對照、かしこけれどそのまゝ繪にうつさまほしく、まして御おほしめしの御やさしきをや。

たちつづく市の家居はあつからむ
風のふき入る窓せばくして

『謹解』 すこしの餘地もなく立ちつゞいてをる市中の家はさぞ暑いことであらう風のかよふ窓が狹くして。

窮屈な市中の家立ち、所謂下町の狹くるしきさまを、行幸の折などにしたしく御覽じおかせ給ふたのを夏の日中の暑きにつけて御おほしやりあそばされた御製であらう。かゝるこまやかなる事にまで大御心をそゝがせ給ふたのである、實にかしこき極みである。

夕つく日かげろふ杜の木がくれに
ひぐらし鳴きて秋風ぞ吹く

『謹解』 夕日の影がてりかゞやいてをる杜の蔭から蜩の聲がきこゆてきて涼しい秋風がそよそよと吹くよ。

寂しく涼しい初秋の晩景の氣分を事もなく御あらはし遊ばされてをる、拜吟するこやがて心身爽快を覺ゆるもかしこし。

時のまにすずりの水のかわくにも
今日の暑さのしられけるかな

『謹解』　すこしの間に硯の水の乾くを見ても今日の暑さのきびしさが知られる。

夏の日盛りに硯の水がかわく「あゝ又かわいた今日の暑さは實に」なぞ何人も口にすることではあるが、このやうに御巧におしらべあゆあそばされたのを奉誦すると言ふべからざる味を感ずる。

このゐる人かたらふ聲もたえはてて
ふけゆくよはに水鶏なくなり

『謹解』　次第次第に夜がふけゆくまゝに宿直の者の話聲も絶えて只、さびしい水鶏の聲ばかりきこえる。

御格子の時刻もほゞ過ぎたので宿直の人々の話聲がたえたのであらう　陛下にはいまだ眠らせ給はずして天下萬民の事ども思ひつゞけ給ふをりから御苑のおく深く閑寂な水鶏の聲がきこえたのであらうと拜察す。

庭のおもに清水のおとはきこゆれど
むすぶ暇もなき今年かな

『謹解』　御苑のうちに涌出る清水のおとは涼しくきこえるけれど今年は事が繁くておりたちて掬ひつゝなぐさむ暇もない。

三十七年の御製である、かしこくも　陛下にはおほんみづから軍國の事を統べさせ給ひ御内苑にだにおりたゝせ給ふ御暇があらせられなかつたのである。此の御製をよく〳〵身にしみて味はひ奉り萬般の御樣子を拜察して今日の強大なる國家の基礎を固めさせ給へる天恩の有難さを忘却せぬ事に心かけねばならぬ。

つばめ飛ぶかげのみみえて田植時
いへに人なき小山田の里

『謹解』 田植時の片田舎のものしづけさよ燕ばかり軒のあたりを飛び去りとび來りて家には人のけはひもせぬ。

畏けれどこの御製を拜誦すれば、藁葺の家一つありそのめぐりは田面にて男女うちまじり早苗植ゑいそぐかた描ける一幅の繪畫を見るが如きこゝちせられて老若男女家を擧つて農事にいそしむその熱心と勞苦を思召やらせ給ふ聖慮のほどを伺ひ奉るべきである。

軍人いかなる野べにあかすらむ
蚊の聲しげくなれる夜ごろを

『謹解』 蚊が多くなつたこの頃の夜を我出征の軍人どもはいづこ如何なる荒野にあかして居ることであらう、さぞつらい事であらう。

三十七年の御製と承はる。敵前露營の軍人どもが蚊軍の來襲にあうてさぞつらき事であらうと、畏けれど御寢覺に蚊の聲をきこしめされての御感懷なるべく、いかに大御心を出征軍隊の上にそゝがせ給ひしかを拜察せらる。只一人の子を從軍せしめた、まことの親にても斯くまで細に思ひやる人が何程あらうか、骨肉も及ばぬばかりの御愛情が伺ひ奉られて、かしこしともかしこし。

夏の夜もねざめがちにぞあかしける
世のため思ふ事おほくして

『謹解』 とかく世の中の爲に物思ひがおほくて短い夏の夜も寢覺めがちにあかすよ。

夏の夜は短いものであるから書間の疲れで誰も熟睡するものである、しかるにその短い夏の夜も國事の爲に大御心をなやまし給ふあまりに御目ざめがちにて夜をあかし給ふと云ふ御意であつて三十七年の御製と承はればいやが上にも恐懼に堪へぬこゝちがするのも理である。

重荷ひくくるまの音ぞきこゆなる
照る日の暑さたへがたき日に

『謹解』 照りつける夏の日盛りはたゞるてだに堪へがたいのに重荷を積んでゆくらしい力車の音がきこゆるどんなにつらい事であらう。

勞働者の上をおほしやらせ給うた、いとも畏き御製である、櫻田門や半藏門あたりの荷車の音が幽に御座所まできこえたのであらうか。この三十一字が畏くもかりそめの事にも民をおほしめす明治大帝の玉の御聲である。忝き極みではないか。かくの如き思召である事を勞働者達に說き聞かするもこの御製を奉誦した人々の義務なり、また臣民たる本分である。

朝の間にものまなばせよをさな兒も
書はあつきに倦みはてぬべし

『謹解』 元氣のよろしい幼兒でも照る日盛はうみつかれて何も出來はすまいからすがすがしい朝のうちに勉强をさせたがよい。

一日のうちで朝が一番大事である。殊に夏はさうである、父兄たるものはこの御製を奉體して長い

暑中休暇をウカ〳〵と過させぬようにつとむるがよい。

わたの原おひてをうけてゆく舟の
片帆にかかるゆふだちの雨

『謹解』 大海原を追手の風をうけて走つてゆく白帆に今しも夕立の雨がかゝるよ。

片帆は眞帆に對する詞で一方に偏らせた帆のことを云ふのであるが、この御製ではおほらかに只、帆と解し奉るべきである 凉風を孕んで輕快に走りゆく沖の白帆に今しもかゝる夕立の雨よ、かしこけれと拜誦すれば忽、凉風腋下に生ずるこゝちがする。

はらはずは思はぬかたにかたぶかむ
露おきあまる撫子の花

『謹　解』　撫子の花の露はをり〳〵拂ふがよいなほざりにしたならばさんでも無い方にかたぶくであらうぞ。

アラヌ方は思はぬ方、卽、意外なる方と云ふ事、女子を撫子にお譬へになつて女子教育の片時も等閑に附すべからざる事を御諭しになつたのである、あらぬ方にのみ傾きがちの今の世の有樣を見てはひとしほこの聖訓が身にしみて伺はれる。

磯菜つむをとめが聲ぞさこゆなる
なざさの松のかすみがくれに

『謹　解』　ほんのりと波うちぎはの松をこむる霞のおくに磯菜を摘む少女等の可憐な聲がきこゆる。

磯菜は海邊に生ずる食料とすべき植物の總稱である。かたなびきした群青の磯馴松に金泥の霞を匂はせたる古き繪卷物なぞくり展べたやうな優美な御製である。

てるにつけ曇るにつけて思ふかな
わが民草のうへはいかにと

『謹　解』　照れば照るてにつけ、曇ればくもるにつけてわが臣民いなりはひに妨げはなきかと思はぬ時はないぞよ。

「わが民草」と仰せられたので「照るにつけ曇るにつけて」がしつくりあてはまるのである、この御やさしき御製のうちにこもれる御仁愛は猶慈母が嬰兒を寢る間も忘れずに健全に生長せしめて幸福なる身となしたいと思ふと同じく　陛下の赤子たる七千萬の臣民の產業發達に障りは無きかと晴雨につけても大御心をなやまし給ふ、吾人臣民たるもの奮勵努力この鴻大なる天恩に報い奉らざるべからず。

あかつきのねざめしづかに思ふかな
わが政事いかがあらむと

『謹解』 わが天下に施す政事の適否はいかがであらうかともの靜な曉の寢ざめに思ひつづけることよ。

善きを取り惡きを捨て、外國に劣らぬよき國となさむとは大局の御方針であらせられた、その御大志を御遂行あそばすには夜となく晝と無き御苦心の一部がこの御製にあらはれたものと謹で拜察し奉る。

秋の夜の長きにあかす燈火を
かかげて文字をかきすさみつつ

『謹解』 秋の夜は長いけれどもその長きにも飽かず燈火の下に手習ひをすることよ。

スサフはみ心の進ませ給ふこと、こは畏くも陛下御壯年にましまして侍從達を御相手に秋夜の闌くるもおぼにさせ給はず御習字をあそばされた頃の御製ともれ承つてをる。拜誦すれば燈火の下に御机に倚らせたまへる御氣色がはつきり心に浮んでくるもかしこい事である。

桐火桶かきなでながら思ふかな
すきまおほかるしづが伏家を

『謹解』 あたゝけき桐火桶をかきなでながらも思ひ遣らるゝは隙間おほくて寒き風の吹き入る賤が伏家のありさまである。

この御製と云ひ「市の家居はあつからむ」の御製と云ひ寒暑につけ臣民の上をおもひやらせ給ふ畏く忝なき大御心は一つである。

ふくる夜の霜ふむ人もあるものを
火桶にのみやよりあかすべき

『謹解』 たつぎの爲にふけゆく夜はの霜をふむ人もあるのに斯く火桶にばかりより添うて夜をらかしてすむものであらうか、決してすまない。

寒風ふきわたる夜の霜を踏みつゝたつぎの爲とは言ひながら遠き道をかへる人々の上をしのばせ給うた御製である。夜業を終へて霜白き川の堤をかへる人達なぞこの忝なきおほしめしを承つたならば定めしその苦勞を忘れてます〳〵其の業を勵む事であらう、否はゆまねばならぬ。

家富みてあかぬことなき身なりとも
人のつとめに怠るなゆめ

『解』 わが家、富裕にて何の不足なき身分なりとも世の中の人の務を忘れてはならぬ。

怠ルナユメのユメは「努めて」又は「つゝしみて」の意である。兎角、浮華安逸に流れやすい盛族富豪の子弟を御訓戒あらせられた御製を拜察して朝夕これを拜誦すれば自然に世間の尊敬を受けて思かけぬ災にかゝる樣な事は斷してない。

鬼神も泣かするものは世の中の
人のこころのまことなりけり

『謹解』 あらぶる鬼神にもあはれと涙を催さしむるものはこの世の中の人の誠である。

鬼神は荒々しき神である、その荒ぶる鬼神をもあはれと思はしむるが人の心の誠であると、誠實の萬能なることをお示しになつた御製と拜察される。

天をうらみ人をとがむる事もあらじ
わが過を思ひかへさば

『謹解』　我身を省みて我身の過失を思ひ出さば天を怨み、又、人を尤めることはあるまい。自省の德を說かせ給へる御製である。人の己を敬せざれば退いて我身を顧みよと古人も謂うて居る我身を省ずして天を怨み人を尤むるは身知らずの甚だしきものである。

並びゆく人にはよしやおくるとも
ただしき道をふみなたがへそ

『謹解』　共に進む人にはよしやおくれても横さまの道には踏み込まずに正しい道を進まなければならぬ。

ナラビユク人は肩を並べて共に世に立つ人にて同僚、同輩、又は同業者にも通ずる詞である、同輩に先を越されたを殘念がりてあらぬ横道に踏み入るを戒めあそばされた御製と拜察される。

とる棹のこころ長くもこぎよせむ
蘆間の小舟さはりありとも

『謹解』　繁き蘆間を分けつゝ漕ぎゆく舟の障りは多くとも手にとる長き棹の如く心長く氣をおちつけて目的地に漕ぎつけようぞ。

こは遼東半島還附の時にあそばされた御製のやうに謹解する向きもあるが決して然らずこは三十八年の御製にて勿論遼東問題もその御感想の一大元素たるは申す迄も無いが御國威の振ふと共に內治外交さま〳〵の事ごもに御耐忍の末、千古未聞の三十七八年戰役の難局に立たせ給ひて始めてこの御製となりて出現したものと拜察す。この御製に就て追懷する一佳話がある同年の夏　東宮殿下野州塩原の御用邸に御避暑中であらせられたので時の宮內大臣田中光顯伯は御機嫌伺ひに伺候し歸途同地滯在中なる高崎御歌所長の別邸を訪はれた、折しも御歌所長は机上に數百首の御詠草を安置拜見中であつたが其の內にて殊にこの一首の御優越なる事を語りつゝ共に拜吟し共に感激せられて宮相は歸京匆々

陛下に拜謁して御宸筆はあまりに畏し　皇后陛下の御代筆にてこの御製を御下賜あらむ事を願ひて勅許を蒙り今家寶として敬藏せらるゝ御短冊がある、これはとりもなほさず　兩陛下を並べ拜し奉る事になるので唯一の國寶と仰敬すべきは申す迄もないことである。

人はただ誠の道をまもらなむ
たかきいやしきしなはあれども

『謹解』　人たる以上は只、誠の道を守らなければならぬ守つてほしい、たとへ身分に高下があつても貧富の別があつても。

タダは「是のみ」「專」にてこの御製にては一筋にと解し奉るべきである、シナは階級と云はむほどの意、人道、卽、誠の道であるとの御教訓である。

さしのぼる朝日のごとくさわやかに
もたまほしきは心なりけり

『謹解』　今しも東の空の橫雲を吸りて、けざやかにさしのぼる朝日の如く、何の隈なすものも無くサッパリと持ちたいものは人の心である。

爽かなる旭光をあふげば誰が胸にも無限の希望と遠大の勢力とが滿ちわたるであらう　陛下がこの御製をあそばされたのは蓋、雲霧の如き雜事に拘泥せずして「陽氣なれ」「元氣なれ」との大御心と拜察せらる。

たらちねの親のこころは誰もみな
年ふるままに思ひしるらむ

『謹解』　親の愛情と云ふものは誰も皆若き時には心にそまずウカ〳〵として居るものであるが次

第次第に年をとるに隨うてそれがよく思ひ知らるゝであらうぞ。

タラチネノは親の枕辭、實に「子を持つて知る親の恩」と云ふとほりに一年ごとに身にしむものは親の恩である、又「孝行のしたい時分に親は無し」と云ふ世俗の比喩もある、この御製を拜誦して悔無きもの幾人かある。

あさみどりすみわたりたるおほ空の
ひろきをおのが心ともがな

『謹解』朕が心を薄き綠色にスッキリと澄みわたつたこの大空の如く廣くおほきく持ちたいものぢや。

初句アサミドリは「淺綠色に」といふこと、ココロトモガナのガナは希望の意、一點の浮雲もなくスッキリと澄みわたつた廣き大空をやがておんみづからの大御心となされたいと云ふ御希望をお述べになつた御製である、畏くも　陛下にはこの御理想をさながらに御實現あそばされてをられたので

ある、それにもかゝはらず「心ともがな」と御謙遜あそばされてをる、畏き極みである。

いつくしとめづるあまりに撫子の
庭のをしへをおろそかにすな

『謹解』かはゆしと只、愛するあまりに幼兒をいたはり過ぎて大切な家庭の躾をおろそかにしてはならぬ。

「撫でいつくしむ」と云ふ緣にて愛兒を撫子に御比喩になつて、ともすればその愛に溺れ易き親心の弱點に　大御心をそゝがせ給ひ、家庭教育の大事を御訓誨になつた、いともかしこき御製である。

わけばやと思ひ入りぬる道にしも
高きしをりの見えそめにけり

『謹解』 この道ならば進んでみようと思ひ込んだ道のゆく手にうれしくも高いしるべが見ゆはじいかなる道にこゝろざしても人をのみ頼みにして居つては決して前途の光明が得られるものでは無い、自分の一心が第一のしるべであると云ふ聖訓と拜唱し奉る。バヤは願ふ意の感動詞、シヨリは「撓り」の義にて山に分け入る路にて木の枝を折りかけ置きて歸るさ又は再、來む時のしるべとするものを云ふのである。

つかさ人ささぐるふみはおほかれど
花見るほどのひまはありけり

『謹解』 毎日内閣や樞府から御親裁を仰ぐべく捧呈する文書は多いけれど、しかもおのづから花を見るくらゐの暇はあるものである。

英雄の胸中常に閑日月ありとか申すことの如く、この御製を拜誦すれば如何にも 陛下の餘裕綽々

たる寛仁大度のおほみ氣色が生々としてあふがれて、かしこけれど心身おのづから爽快を覺ゆるを禁じない。

あつしともいはれざりけり煮えかへる
水田に立てるしづをおもへば

『謹解』 熱湯の如き水田に浸つて懸命にたちはたらいて居る農夫等の勞苦を思ひやればかりそめにも暑いなどと言はれたものではない。

夏日の暑さの堪へがたきにつけて下民の艱苦をおほしやらせ給ふ大御心のほど畏き極みである、炎熱百數度にも昇ると云ふ日中に田野の事に勵精する吾が同胞のこれを承らば感慨無量一層の奮勵心を起すや必然である。

子等はみないくさのにはに出ではてて
翁やひとり山田もるらむ

『謹解』 働きざかりの若者共はみな戰場に出てしまうて、あとに殘つた老翁がかひ〳〵しく山田の番をして居ることであらう、あゝ氣の毒なことである。

三十七年の秋の御製であらせられる、其當時は我國は露國と交戰眞最中で豫備も後備も皆、召集せられて滿韓の野に出征した「壯者はみな軍に從うて老いたる者か心さびしく山田を見巡つて居ることであらう、國の爲とは云へ如何にも氣の毒に思ふ」と云ふ御仁慈の滿ちた御製である。寒村僻地の老人輩も如何ばかりこの御製に據つてもの寂しい心を敵愾心に變へて無形の戰鬪力を附加したことであらう、當時各地の有志から老人等が耕地にある寫眞を宮内省に獻上した向も少くなかつた事を記憶してをる。

むらさきの心をたねのをしへ草
おひしげらせよやまと島根に

『謹解』 いつはりなき眞心を種として萠ひいでたをしへ草をこの大和島根、卽、日本國中に繁茂せしめよ。

ムラキモノは心の枕辭、心ヲ種ノ敎へ草は國ぶりなる和歌をおほせられたのである、邪道におちいらぬ純粹なる歌道をば全國に限なく普及せしめよとの大御心と拜せらるゝ、歌を閑人の玩具の如く心得をる人々よく初二の御句を拜誦すべし。

ここそさし昔の家のつくりさま
いまも田舍にのこりけるかな

『謹解』　手をはぶいた質素の昔風の住宅のつくりざまが今も猶、田舎には殘つてをることよ。

コトソグは「事殺ぐ」にて事を省くことである。地方御巡幸の折などに華美を競うた都會の大厦高樓とは事かはつて簡素に丈夫一方に建てた家を御覽あそばされてなつかしきものに御感じになつたのであらう。儉素を奬め給ふ大御心がうかゞはれて畏き御製である。

言の葉のまことの道を月花の
もてあそびとは思はざらなむ

『謹解』　人の心の誠をあらはすのが和歌の本領であり要素である、この和歌を花鳥風月の遊びわざと同じやうに思ふてはならぬ。

和歌を所謂なぐさみものと心得てをる世間の通弊を御訓戒になつた御製である、畏くも　先帝陛下には和歌を第一の御嗜好ことあそばされたと承るが　陛下の御製は如何なる場合にも大御心の誠のみ聲を三十一文字に御示しになつたのであつて決して苟且のおなぐさみ事ではなかつたのである、

春秋の御遊覽の御詠を拜誦しても花は美しい月は清いと云ふ御感じのおくに言ふべからざる深き御意味が含まれてをる。こゝが御製のたふとさである。御叡感のまゝを事もなく御詠じになつたものが、やがて大なる教訓になり、大なる仁愛の誠を拜誦する者の心理にとゞめさせ感動せしむるのである、斯くてこそ目に見えぬ鬼神をも動かすべき和歌の力の偉大なることがわかるのである。

なつしらぬ氷水をばいくさ人
つどへる庭にわかちてしがな

『謹解』　夏のものとも思はれぬこの氷水をば、一滴の水だに乏しいと云ふ戰場にある軍人達に分けて飲ませたいものである。

氷を御覽ぜさせられて直に炎天にさらされて敵と對抗しつゝある出征軍人の勞苦をおぼしやり給へる、御同情のあふれた御製にてこれを拜誦するもの誰かは感泣せざらむ。

すゑつひにならざらめやは國のため
民の爲にとわがおもふこと

『謹解』 どうしたならば國が盛になるであらうか、どうしたならば民が富み榮ゑるであらうかと日夜思ひつゞくる我が此一心は末遂に成就せずに居ようか 屹度成就するであらう 成就するに相違無い。

國の爲、民の爲に我思ふ事は我眞心である、眞心より出づる事であるから必ず成就するとの固い御信念をこの三十一字に御あらはしあそばされたのである。

ひさしくも我飼ふ駒の老いゆくか
惜しきは人にかはらざりけり

『謹解』 年久しく我飼うてをる馬の次第々々に老いてゆくのを惜しむ心は側近く仕へる臣達の老境に入るを惜しむ情と少しも變りは無いものである。

大御心の老驥のうへにまで及ばせらるゝは實に恐れおほい事である、御愛乘の名馬「金華山」なども憐れませ給うた御製かとも拜察される、この御愛馬は今も猶、主馬寮に剝製となつて生けるが如く保存されて居るを見ても如何に御愛撫あそばされたかを伺ふことが出來る。

しづがすむ藁家のさまを見てぞおもふ
雨風あらき時はいかにと

『謹解』 下民の住居をしてをる小さき藁家の有樣を見るにつけて思はれるのは烈しい雨風の日には如何して凌いでをることであらう。

大演習の際なぎに田中の藁家などを親くみそなはしてあそばした御製であらう「雨風あらき時はかにと」との厚き御仁慈實にかしこき極みである。

おもふこと思ふがまゝに言ひいづる
幼心やまことなるらむ

『謹解』 心に思ふことをありのまゝに遠慮もなく言ひ出す幼き子供の心が人間の誠の心であらう。これは「思ふことつくろふこともまだしらぬをさな心のうつくしきかな」の御製と同様に天真爛漫の子供心の愛らしさを御詠じになつのである。

思ふことおもふがままになれりとも
身をつつしまむ事な忘れそ

『謹解』 我が思ふことが思ひの儘になつたとても世の中の事が自分の心のまゝになるとても心が驕つて自分の身を慎むことを忘れてはならない。

大盧の月も滿つる夜あれば缺ける夜もあり、海原の潮も滿つれば必ず干る如く、人の世も得意の蔭には失意があり歡樂の裏には哀情がある、我等はこの御製を拜誦して自分勝手の慾に耽り滿足の上にも滿足を思ふ如き事は慎まねばならぬ。

そのもりやひとり見るらむ昔わが
あつめし庭の秋草のはな

『謹解』 昔、採り集めて植させて置いた故郷の庭の秋草の花は今は園主だけが賞翫してをることであらうよ。

京都の御所をおぼしめし出だされた情味の深い御製である。ソノモリは園丁であるがこゝにては御所の殿掌なること拜見するが宜しからう。

ものまなぶ道にたつ子よおこたりに
　まされる仇はなしとしらなむ

『謹解』　ものまなびの道、即、學問の道に立つ子等よ、怠慢が第一の自分の身の仇である、自分の身を殺すものは怠慢であると云ふ事に氣付かなければならぬぞ悟らなければならぬぞ。

學生を御訓戒になつた御製である、怠つてはならぬと仰せられやして、怠慢ほど恐ろしい敵は無いと御諭になつたところに無限のかしこさ　忝　さがこもつて居るのである忽粗に拜唱してはならぬ。

然るに往々學生たるの本分を忘れてあらぬ横道に狂奔する人々のあるは惜むべき傾向である。

あだし野にいざかがやかせ益荒雄が
　とぎすましたる太刀のひかりを

『謹解』　我が親愛する軍人どもよ汝等が日頃研ぎすましたる太刀の光を敵地に分け入る今の場合にこそ十分に輝かして見せよ。

アダシ野はここにては敵地の意と解すべきである。出征の軍人を鼓舞し給うた勇壯無比なる御製である。

思ふことつくろふこともまだしらぬ
　をさな心のうつくしきかな

『謹解』　胸の中に思うてゐる事どもを取りつくろふこともまだ知らぬ幼兒の心ほど美しいものは無い。

皇孫殿下の御參内あそばされたる折などの御感懷ではあるまいか、僞のおほき飾の多き世間を御戒めあそばされる大御心のこもつて居ることは言ふまでも無い。

つく杖にすがるともよし老人の
千年の阪をこえよとぞおもふ

『謹解』よし杖にすがつて歩いてもよろしいから老人共が千年の齢を保たむ事を祈つてをる。老人を憐み給ふ大御心を拜誦すべし　陛下には地方巡幸の折にも、宮中の御大典にも必ず、高齢者を憐み給ひて恩賜の御沙汰に及ばせられたのである、高齢者を厚く遇することは古來の明君英主の必ず、心がけられた事で　陛下の大御心もこれに外ならぬのである。

つたへきて國のたからとなりにけり
聖の御代のみことのりぶみ

『謹解』皇祖皇宗を始め歴代の天子の聖訓は天地と共に傳はつて來て斯の如く朕が爲に二つなき

寶となつてをる。

ミコトノリブミは即、詔書である。ヒジリノミヨは御歴代を御尊崇になつて聖代とおほせられたのである　陛下が何事につけても　皇祖皇宗の御遺訓を重んぜさせられた事は御製毎によく伺ひ奉ることが出來るが、殊にこの御製は「國寶である」とまで強く仰せられたところに、最深遠なる賢慮を伺ひ奉らねばならぬ。

庭草にみづそそがせて月をまつ
なつのゆふべは思ふことなし

『謹解』庭に生ひしげれる草に水をうたせてさしのぼる月を待つ夏の夕のすがすがしさ、只よいこゝちで何の物思ひもない。

園丁の打水するあとより涼しき風が吹き起つて、照る日によれた草の葉も蘇つたであらう、陛下が内外雑多の御政務に御つかれ遊ばされた玉體を月待ちがてら御階の端近くはこばせ給うた御姿が拜

誦する者の眼に浮んでくる。

年年におもひやれども山水を
くみてあそばむ夏なかりけり

『謹解』 いつも夏がくる度に思ひやるけれどさて心しづかに山かげに湧出る清水を掬んで遊ぶやうな機會がない。

陛下四十有七年の御治世中に避暑避寒の御幸のあつた事が無い、實に恐れおほいことである、それに就て次の如きことを洩れ承つてゐる、或年田中宮内大臣が玉體におさはりあらせられてはと推し奉り御避暑を乞ひ奉つた時に 陛下には「避暑するものとせざる者と何れが多き」と御下問があつた、宮相は恐る〳〵避暑は中流以上の少數の者の致す由を言上したところが 陛下には「然らば朕はその多き方に從はむ」と仰せられて御聴許が無かつたと云ふ。今この御製を拜誦するもの兒童走卒に至るまで御盛德を追慕し奉り感泣せぬものはあるまい。

なにがしの寺の文字ある古瓦
たまにならべてかざりけるかな

『謹解』 つまらぬ物に見ゆる古き瓦ではあるが麗しい珠と並べて床に飾らせて置くそれは古き歴史をもつた寺の遺物であるからである。

一片の古瓦に對せられてもその寺の歴史を知らるゝ文字あるために珠玉と同等にみそなはす大御心より拜察すれば苟くも一能ある者は階級の如何を問はず御任用遊ばされた、さればこそ聖德は六合に光被するに至つたのである。

兵士のかてもまぐさもはこぶらむ
牛もいくさの道につかへて

『謹解』 餘り活潑には働けさうにも見ねぬ牛までも人のやうに軍隊に使役されて兵士の糧食も牛馬のまぐさも運搬の役に立ちつゝあるであらう。

日露戰役中の御製には臣民の勞苦を思召すと共に牛馬の上にまで及ぼされて馬の御製にも人であつたならば人と同じく勳章を授けて其功績を賞してつかはしたいと仰せられたのも奉誦して居る、牛馬心あらば果して如何況んや人間をや。

種なくて繁りも行くか世の中の
人の心の物忘れ草

『謹解』 形なき人の心の變化ほど不思議な物はない何が原因といふ事も心付かずして物毎に忘れやすく成つて行く殘念な事である。

ワスレグサ萬葉集には萱草の字を用ゐたり又蘆の異名にも用ゐるものなれど此御製には輕く物わすれする御材料に借らせられたに過ぎぬ草を以て組立て給ふが故に原因の事も種と遊ばされた御事と拜

察す。

うちのりて雪の中道はしらせし
手なれの駒もおいにけるかな

『謹解』 眞白に降り積つた雪の中でもうちまたがつて勇ましく走せ巡つた事もあるその愛馬も惜しき事に年をとつてしまつた、老いたるはわればかりではない。

三十八年の聖作である、上下を擧りて緊張したる折柄とて英氣に充たせられたる陛下に於かせられても老樹鬱蒼たる禁苑に白皚々と降り積つた雪景に對して恐れながら聊か御髀肉の嘆もあらせられた御事ならんと拜察せらるゝもかしこし。

にひばりの畑も田面もおほけれど
ひなは荒野のなほ廣くして

『謹解』　新しく開墾した田畑は勿論澤山あるけれどゐなかにはまだ〳〵荒れたまゝの野原が多くある。

地方御巡幸の際に親く御覽遊ばされた御實感で何とも恐れ入りたる事柄である、年々增加する人口の將來を慮りて海外發展を策する當局者の苦心もさる事ながら內地に於て然も鳳輦の通過する場所にすら尙この御製に遊ばされたるやうな事ありとすれば爲政者たる人宜しく沈思默考して聖旨に對へ奉るべきである。

まさばしらたちさかゆるも動さなさ
家の主人のあればなりけり

『謹解』　上下を問はず家の繁榮するのは柱と立てらるゝ主人たるものが堅忍不拔の精神を持つて居るからである。

一家の主長を御訓戒遊ばされた御製である、いたづらに名門をほこり富豪をたのみて自身を省る

の能力なく父祖の努力を感謝するの義務も忘れて放慢安逸に日に送り遂に家名を汚穢して醜聲を天下に散布するが如き家長なからしめん爲めの大御心を拜察し奉る。

國といふ國の鏡となるばかり
磨けます荒男やまとたましひ

『謹解』　地球上にあらゆる國の人々に鏡の如く仰ぎ見られるやうに有爲の人達は素より光ある所の大和たましひをますゝ〳〵磨きあげよ。

吾が神州を賭して露國に對し正義の戰ひを宣し給ひし當時の聖作である、遼東還附の國辱を雪がんとする舉國一致の精神は凝つて鐵丸の如く向ふ所敵壘と敵艦を破壞し盡して遂に和を請はしめ世界の列强を驚嘆せしめたる秋霜烈日の如き大和魂を發揮したる意氣を御嘉賞あらせられ今數歩を進めて萬國の模範と仰がるゝ迄に奮勵努力せよと御激勵遊ばされた御製である。

老若男女を問はず一度是を拜吟せば帝國の位置が如何に尊きかを知ると同時に臣民の責任も又如何

に重きかを了解するであらう。

大空にそびえて見ゆる高嶺にも
のぼればのぼるみちはありけり

『謹解』 青々と晴れ渡つた空にそびえて居る高山にも登つて見れば登られる道路はあるものである。

苟も是なりと信ずる事柄に向うては勇往邁進するがよい、其の勇氣あらば如何なる難局に立ちても必一筋の進路が見出だせるものであるといふ御確信を歌はせ給へる御作と拝察す「雨だりにくぼめる石を見ても知れ難き業と思ひすてめや」の御製と併せて拝誦すればますく堅志不拔の大御心を伺ひ奉られるであらう。

岩が根のここしき山を照る日にも
たゆまずこゆるわがいくさ人

『謹解』 草木も枯るゝ夏の日盛に屈せず撓まず帝國軍人等は炎熱にやけた岩石の嶮しい山を踏みつゝ進んでをる。

山海數百里の外なる滿韓の山野に轉戰する軍隊の行動を御目前に見そなはす如き御製と拝し奉られるが大元帥として御統率遊ばさるゝ 陛下の御坐居には時々刻々の戰報は櫛の齒を挽くやうに奏上されるから御親しく各地の戰線に立たせ給ふ御心地遊ばされて山路の嶮しさ炎熱の烈しさを御直覺あらせられて其の勇ましき働きを御嘆賞遊ばさるゝ一方には國家の爲とは言へ如何にも氣の毒な事であるとおぼしめさるゝ大御心がありくと伺はれて覺えずあつき涙のこぼるゝ御製と拝し奉る。

やすくしてなし得がたきは世の中の
人の人たるおこなひにして

『謹解』 世の中に立ちて人のふむべき道をふみ行ふ事はいかにもたやすいやうであるがさて實行は誠に艱難なものである。

聖代五十餘年の長き年月にあらゆる萬難に當らせられて常に宸襟を惱まし給ひ人世を御遠觀遊ばされた御感懷であらせられやう畏み敬ひて誦し奉るべきである。

いさをある人を教へのおやにして
おほしたてなむ大和撫子

『謹解』 帝國臣民の子供には何れの道にも功績と品位の高き人を手本として教育するやうにありたい。

ヲシヘノオヤは教師である子女の見習ふべき手本目標とも見らるゝものであるから文武農工商其他百般の夫々の道に立ちて功勞と人格を兼ね備へて世人の尊敬を受くる人を選びて指導の任に當てたいものであると思召さるゝ最廣遠なる御製と拜察さるゝを乃木大將の爲に遊ばされたかの如くに謹解する向もあるは誠に恐れ多き極みである、國家富强の基礎となるべきあらゆる方面を含蓄する學業の方針をあやまらしめず高尚ならしめむ爲めの聖訓を一部分に局限するは誤解も亦甚だしと斷言するを憚らぬ、されど勳功人格俱に千歲の儀表と仰がるゝ乃木將軍の如きは此の御製の第一義たるは申す迄もない事である。

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは
人の心のまことなりけり

『謹解』 人の目にこそ見えね神はよく人の心の底まで御見とおしになる其神に對して少しも恥しい事

のないものは眞心である。

至誠ほど麗しきものはない畏こけれど　皇祖皇宗の神靈にあらせられても玲瓏玉の如き人の誠心の曇りを見出し給ふは難い御事であらうとの聖慮であらせられやう。

尙御詞の似通ひて御内容の差ある左の御製もあらせられる。

目にみねぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけれ

總て此のやうに御心のゆくまで再三御推敲を試みつゝ十萬にも餘る御製を遊ばされた熱烈なる御研究心には古今を通じて何人か及び奉る事が出來やう恐れ多き事ならずや。

世の中にひとりたつまで修め得し
業こそ人のたからなりけれ

『謹解』　何事をなすにも困難なるこの世の中に人の力をからず確に獨立してゆかれる迄に專門の業を修めたその業こそは實にその人の唯一無二の寶である。

深遠なる學業は修め得たその人の寶であると仰せられて暗に淺薄なる學者を御訓戒遊ばされた事と拜察せらる、蘊蓄ある學者は延いて國家の寶となるからである。

いかならむ事にあひてもたわまぬは
わが敷島の大和だましひ

『謹解』　大和魂の尊さはいかに難艱な事に出逢うてもその事にうち勝つて折れも曲りもせぬ事である。

シキシマは日本帝國の一名ではあるが茲には大和の枕辭である、日露戰役中の聖作で出征軍人の勇敢なる戰鬪から其後援者たる一般臣民の熱烈なる行動等を併せみそなはして賴もしきは大和魂なり忠君愛國の精神なりと御斷定遊ばされての御感懷ならむと拜察す、然るに今や外來の低氣壓は各所に發生して雨となり風となりて大和魂を撓めずむば止まざらむとす此時に方りて同胞の覺悟果して如何。

池水に小舟うかべて遊びつる
昔戀しき ふるさとの庭

『謹解』 庭の池に舟を漕ぎまはりておもしろく遊んだ故郷の庭(京都)はいつまでも忘れ難くこひしきものである。

「故郷忘れ難し」といふ諺はよく人情を穿つた言葉で階級によりて差別あるものでない事をかしこけれどこの御製を拜誦して伺ひ知る事が出來る、無邪氣にして生々と生立つ少年時代に思ふ儘の遊びをした故郷の父兄友人を始め無心の山川草木も皆知己ならざるはなし年々歳々身分の境遇こそは變れ望郷の情は常に同一の軌道を廻るものである、萬乘の位にあらせられてもこの御追懷あらせられて御やさしき大御心のほどを拜察すれば大宮御所の御池のこぜが淵なども其ひとつにはあらざるか中島に架したる古き木橋も勅命によりて石造に改築せられた例もある尙其の他に御苑の一木を移植するにも勅許を得ざれば着手する事は叶はなかつたことも毎々承つて居る。

敷島の大和心のををしさは
事ある時ぞあらはれにける

『謹解』 いかゞであらうかと思ふた朕が臣民の國家に盡す精神は大事の時に當つて現す其勢力は實に非常なものである。

日清の役後十年の長日月を耐へに耐へ忍びに忍んで練磨された上下一致の愛國心の發露をみそなはして輒もしく思召された御滿足の御表現と拜誦し奉る。

「國といふ國の鐵となるばかり磨け益荒雄大和魂」の御製も御同時の御作で義勇奉公心の活躍いかに大御心を動かし奉りしかを伺ふに足る、千古未聞の君臣一體の大活動は此時を以て頂點に達し國家は一躍して一等國の班に列し國民は列强の畏敬を受くるに至つた當時を追懷すれば覺わず快哉を叫ばしむ噫、先帝崩じて既に十年世界大勢の推移と共に變化しつゝある吾帝國の現狀を思へば今昔の情禁ずる能はずして唯熱涙の衣襟を濡すばかりである。

こもすればあらぬ方にと踏み迷ひ
教へ難きは人の道なり

『謹解』 正直にして能く正道を進んで居る人もふとしたはづみで横道にふみ入り易いもので如何に細かに心を用ゐて教育しても正道を進ませる事は艱難である。

『トモスレバ』は『やゝもすれば』『なにとかすれば』と言ふ詞である要するに正義人道を能く學び能く行ふて國家有用の材となるべき人物を養成するの至難なる事を嘆かせ給ふ至仁至愛の溢るゝ御製と拜誦して金甌無缺の御國體と相反せざるやう細心の努力を惜まざらむ事を教育者に向つて切望する外はない。

たらちねの親の教へを守る子は
學びの道もまどはざるらむ

『謹解』 すなほにして親の教ふる事を能く守る子供は學問するにも親の言ふ通りであるから少しも其の道にふみ迷ふ事はあるまい。

タラチネは親の枕辭、何事にも兩親の指導に柔順なる子供は些の邪念が無いから學問の進歩も早く身を立て家を興し進みては國家の公益を謀り君には忠良の臣となり親には孝順の子となりて忠孝一本の國風を實現する將來迄も含ませられたかしこき御製と拜誦す。

ただしくも生ひしげらせよ教草
をとこ女の道をわかちて

『謹解』 兎角まちがひの生じ安きものであるから其のまちがひの無いやうに心を用ゐて男女の境を明瞭にして教育をせねばならぬ。

ヨシヘグサは教へ草の種といふ言葉なればこれに因みて生ひ茂らせよと添へさせ給ふたのである、少年少女の教育ほど重かつ大なるものは無い一歩これを誤らむか終生不幸の淵に沈んで遂に救ふべか

らざる結果となる其の不幸を未然に防がむ爲に大御心を盡くさせ給ふ事を拜察して父兄たるもの又教育家たるもの朝夕拜誦すべき御製であらせられる。

いかならむ藥あたへて國のため
いたでおひたる人をすくはむ

『謹解』 このやうな藥を飲ませて國の爲に創を負ふた人々を救ふであらうか。

イタデは痛手にて戰ひに深手をおひたること、三十七八年戰役中の御製で名譽ある戰傷の將卒を劬はり給ふ大御心かしこき極みである連戰連勝實に故無きにあらずと云ふべし。

うつはには從ひながら巖がねも
とほすは水の力なりけり

『謹解』 水は方圓の器に從ふと云ふ語の如く器次第で如何樣にもなるけれどいざとなれば堅き巖をも貫きこほすこれが卽眞の水の力である。

人も斯く外には溫雅に謙遜にして內には岩をも貫くべき剛毅の精神を養ふべきである、この御製も水の本質をさら〳〵と御詠じになつたうちに激流岩をも貫くべき强き御敎訓が含まれてをるものと拜察せらるゝ。

幼子がならへばならふほどみえて
きよくなりゆく水くきのあと

『謹解』 子供等が手習をすればするほどその効があらはれて筆蹟が美しくなりゆくことよ。

「それにつけても手習はすべきわざである」との御意が含まれてをる、ミヅキクは古、使を遣はすに梓に玉をつけて持たせたに依つて文を玉梓といひ又其梓をみづ〳〵しき木といへるに起るといふ說である今はそれが轉じて手跡の雅言のやうに用ゐられてをる。

うけつぎし國の柱のうごきなく
さかえゆく世をなほいのるかな

『謹解』 皇祖より受け繼いだ國の柱、卽國の基の動くことなく萬々歲に榮ゑゆかむことを神明に祈るうへにも祈りつゝある。

「君が代は千代に八千代にさゞれ石の」の國歌は皇祖の無窮を祈り奉つた臣下の眞心であるが、この御製はこの意味を聖意に仰せられたものと拜承す、ナホイノルカナのナホに窮りなき思召がこもつてをるのである。

おのが身を修むる道はまなばなむ
賤がなりはひいとまなくとも

『謹解』 自分の身を修める道だけは學ぶやうにありたいそれぞれ世わたりの營におはれて少しの暇もあるまいけれども。

人たるものは身分相應に人の人たる道の修養がなくてはならぬ身分が卑く貧しくて生業に忙しいからとてふむべき道の心がけ無くては人の人たる資格を失ふことゝなる、この御製は洵にこの意味を御詠じ遊ばされたものと拜察す。

はなちたるまきの若駒いづれをか
わがうまやにはひかむとすらむ

『謹解』 何の苦もなく思ひ〳〵に若駒は勇みにいさんで遊んでをるがその中のいづれの駒を朕が乘る料として厩に引いてゆかうとするのであらうか。

御牧に若駒の群がり勇んでをるさまが眼前に見ゆるようで快活なる御製である、是を拜しても如何に馬には御興味を持たせられしかを伺ひ奉る事が出來る。

つかさ人まかでし後の夕まぐれ
　こころ靜かに書をみるかな

『謹　解』　役人共の退出した後の夕方は心をおちつけて靜に讀書をする。

「晝の間は國務が繁くてさる暇はないが」といふことを句の初に置いて解し奉るべきである、マカデは退出することである、早朝より御學問所に出御ありて忙しき國事をみそなはせられ百官有司退出の後にやうやく御心おちつかせ給ふて好ませ給ふ書籍を御手にあそばされた御くつろぎの御けしきでかしこくも　陛下の御日常を拜察することの出來る　忝き御製と拜誦する。

山のおく嶋のはてまで尋ねみむ
　世にしられざる人もありやと

『謹　解』　すぐれたる器量才能をもちながらまだ世に知られない人もあるであらうからさる人をば山の奥沖の小島の果までも尋ね求めよう。

先帝陛下の御治世は、身をさし出して御奉公をした忠良の臣が雲の如くあつたので明治の盛大を致したのであるがさる忠臣を御見出しあそばされたのは決して偶然ではないとはこの御製を拜誦して打肯かるゝのである、實に偉大の君主におはしましたことを今更ながら感ぜらるゝ次第である。

いまはとて學びの道に怠るな
　ゆるしのふみを得たるわらはべ

『謹　解』　卒業證書を受けた子供等よもうこれにて安心ぢやと學問を怠つてはならぬ、むしろ今より一層勉強せなければならぬといふ心をもたなければならぬ。

ユルシノフミは卒業證書、學校の卒業は學生にとりては一の凱旋ではあるが勝つたからとて安心をしてはならぬ、前途は遠遠である油斷をしてはならぬぞとの大御心と拜察す。

千萬の民よ心を合せつつ
國に力をつくせとぞおもふ

『謹解』 六千餘萬の我大日本帝國の臣民よ皆々心を一つにして國家の爲めに力を盡してくれたらよからう必つくして呉れよ。

「國のためいよ〳〵つくせ千萬の民よ心を一つにはして」の御製と同じく擧國一致を專念におほしめす聖慮を拜せられる、チョロッは多き數をおあらはしになる爲の詞にて千とか萬とか當てはまつた數のことではない。

蘆原の國とまさむとおもふにも
青人草ぞたからなりける

『謹解』 我が國をいやが上にも富み榮ゑさせんと思ふにつけても第一に貴い寶は人民である。

蘆原國又、豐蘆原瑞穗國は我國の古い呼び名である、青人草は「蒼生」と云ふ語と同じく國民を指す蘆原の國とお詠み出でになつたので青人草とおかけあはせ遊ばしたのであらう、臣民を寶とおほしめされた畏き御製で我國が世界の五大强國の一つに數へらるゝのもこの無量の御聖德のあらはれであると信ずる、この御遺訓を繼承し奉りて帝國の國威を失墜せしめざる事に努力するはわが七千萬同胞の大責任たるを忘るべからず。

したはしと思ふ心やよひけむ
むかしの人ぞ夢にみえける

『謹解』 日頃から慕はしいと思ふて居る心が通じたのであらう今宵うれしくも昔の人が夢にみえた。

畏くも 陛下の御夢にあらはれた「昔の人」とは誰であらう皇祖皇宗の御事か、賢相良將の人々か

又は御幼年の御時からの侍臣か、それとも御乳をまゐらせた老女にてもあらうか、御親愛深き御製であらせられる。

うしろにはいつなりにけむ漕ぐ舟の
ゆくへはるかにみえし嶋山

『謹解』 何時の間に後にまあなつたのであらうか漕ぎゆく船の前途遙に見わて居つたかの島がさ。

軍艦なぞに御召しになつた時の御直感であらう、洵に航海中の景色も氣分もよくあらはれてめたき御作である漕ぐ舟と仰せられしは單に輕き形容に御使用遊ばされたものと拜見すべきであらう。

くもりなき心のそこのしらるるは
言葉の玉のひかりなりけり

『謹解』 すこしも曇りのない人の心のおくそこの知らるゝものは言葉の玉の光である即ち歌によりてよくわかる。

言葉の玉は言葉の花なぞといふに同じく言葉のあやといふほどの意にて歌のことなり、人の心の誠は歌でよくわかる歌は洵に人の眞心をあらはす珠玉とも見るべきものであると仰せられたので歌の功德をお讃めあそばされたのである。

かざりなき世にのこさむと國のため
たふれし人の名をぞとどむる

『謹解』 限りもなき千萬年の後の世までも遺すべく國事に殉した勇士の名を書き止めて置く。

陛下には戰役毎に戰場の露と消えた將卒の名を書きしるさせ給ひ宮中に御保存になつたと申す事を承つた人は多いやうであるが未だ如何なる方法に遊ばされたかを知れるは或る部分に限られてあるから茲にその大略を記して大御心の如何に有り難きかを識らしめたい。

先づ日清戰役を記念すべきは振天府、北清事變に懷遠府、日露戰役に建安府と命名された堂々たる大建物が宮城内の二重橋と賢所の中間の廣大なる御場所に建て連ねられてある、館内には殊勳を奏したる我陸海軍の兵器例へば僅に緣ばかりを殘したる聯隊旗とか蜂の巣の如く敵彈を受けたる軍艦の通風器とか苟くも重要なる戰歷あるものは彈丸の破片までも陳列せられ、陛下御坐右の記念としては步騎砲工各兵科の兵器を併用せる燈臺もその中にある一方には美麗壯重なる帖に所謂護國の神として靖國神社に合祀らるゝ名譽の將卒の芳名を所屬別に次第して明記せらるゝ而已ならず將校以上は寫眞を壁間に掲揚せられて一目のもとに勇姿に接する事を得せしめ給ふ此の寫眞御聚集の前に身にしみて承りし事がある此の事を思召し始めし時には將校士卒の別なく寫眞を取りまとめよとの　勅命であつたから陸海軍共に細心の注意を以て其の實現に努めたが將校以上は兎も角下士以下幾十萬といふ多數の勇士の事であるから殘念ながら全部を得る事が不可能である爲めにやむ事をゐずその旨を奏上した　陛下には頗る御遺憾の御けしきにて如何にも多數の事なれば不可能なるも無理ならずさればとて假令一人にても其の内に漏るゝ者ありては却て可憐の極なれば寧ろ完全を得らるゝ將校以上に止めよとの御沙汰ありし由是を以て拜察すれば有形の寫眞こそはなけれ一歩兵一水兵の末に至る迄英魂

は無形の御仁惠に感泣したる事必然なり世人の多く知らざる宮中に於て尙此の如し外にあつては靖國神社臨時大祭に　兩陛下行幸啓あらせられて英靈を慰め給ふ至仁至愛の御表現を仰ぎ奉りて感泣するは啻に遺族と知友間位に局限せらるゝ御事柄ならんや。

昭憲皇太后が社頭にて

神垣に涙手向けて拜むらし歸るをまちし親も妻子も

と御讀み遊ばされたのも此の折の事にて勇しき凱旋を待ち暮したかひなく遺骨となつて歸りし將士の遺族に御同情厚き御やさしき御心を伺ひ奉らば鬼神も一掬の涙を手向け護國の神靈に感謝せむ。

たらちねの親のみまへにありとみし
夢のをしくもさめにけるかな

『謹解』　父天皇の御前に侍つて居つた、うれしいなつかしい夢がさめてしまつた嗚呼惜しい事で

あつた。

タラチネノは親の枕辭、厚き御孝道を伺ひ奉ることの出來る御製である、かしこくも　陛下が父天皇の大故におあひあそばされたのは御十六の御時と承つて居る、恐れおほきことながらこの御夢にはいたいけな御童形の　陛下がおあらはれあそばして、父天皇と御物語あそばされた事であらう拜察し奉れば涙がこぼるゝばかりである。

暇あらばふみわけて見よ千早ふる
神代ながらの敷島の道

『謹解』　和歌は神代ながらの我敷島の道である、自然暇があつたならば踏み分けてみるがよい研究してみるがよい。

フミワケテミヨは「こゝろざしてみよ」「入りたつてみよ」と言はんばかりの意である敷島道におほせられた緣で「踏みわけて」とあそばされたのである、畏くも　陛下はかくの如き忝き思召

にて神代ながらの和歌、眞心を本とした和歌を國民に御奬勵あそばされたのである。

おころへしさまはみえねど老人の
涙もろくもなりまさるかな

『謹解』　さまで衰へたと云ふ氣色は見ねぬけれど老人はこの頃何となく涙もろくなつた。側近奉仕の老臣のうへなどをおほしめしたのであらう、氣は張つてゐても涙脆くなるのが老境に入つた人の常である、かゝる心理狀態の機微を巧に御詠みあそばされてをる、御同情の溢れたいとも畏き御製である。

あやまちを諫めかはして國のため
力をつくせますらをのとも

『謹解』 日本帝國の大丈夫たるものよ、過失あらば互に諫めあふてまめやかに國家の爲に力を盡くせ。

その短を諫め交すが眞の友誼である、眞の友誼を結びて國家に盡せと云ふ御教訓と拜察せらるゝ、マスラヲノトモは「益荒雄ども」と云ふほどの意。

をりをりに思ひぞいづる國のため
心くだきし人のむかしを

『謹解』 國家の爲に心膽を碎いた昔の功臣どもの功績はさま〴〵の折に思ひ出されて忘れられないものである。

事のあるをり思ひ出されるとの玉の御聲がきこえたならば亡き靈も苔の下で感泣する事であらう。

事なしとゆるぶ心はなかなかに
仇あるよりも危ぶかりけり

『謹解』 無事だからとて緩ぶ心はかへつて仇敵が前に控へて居るよりも危險である、ゆめ油斷をしてはならぬ。

戊申詔書に「荒怠相誡め」と宣はせられた聖旨を更に深く伺ふことの出來る畏き御製である。

ささやかに見ゆる家居もかたつむり
一人すむには事たりぬべし

『謹解』 何處へ行くにも自分の背におふてゆく蝸牛の家は小さくみゆるけれどしかしその身一つを容るゝには十分で寧ろ氣樂であらう。

若竹の露うるはしき朝の御苑の御散歩などに蝸牛を御覽あらせられての御口占であらう「足る事を知れ」「分に安んぜよ」との御教訓の含まれてをることを拜見せねばならぬ。

つもりなば拂ふかたなくなりぬべし
塵ばかりなる事と思へど

『謹解』 僅なる塵ほどの事と思ひ輕めてゐても打ち捨てゝ置けば時の經つに隨つて積りに積つて終にはいづれから拂ふべきか手の着けやうも無くなるであらう。

千里の差は一歩より始まる些細の事とて油斷をしてはならぬとの御教訓と拜誦せらる。

國のためあだなす仇はくだくとも
いつくしむべき事な忘れそ

『謹解』 我國に手むかひをする敵軍は容捨なく打破つても其の半面には慈愛を垂るゝ事を忘るゝな如何に戰場なりとて殘忍なる行爲があつてはならぬ。

三十七年の御製である出征の軍隊を御諭しになつたので「罪を惡んでその人を惡まず」といふ恩澤洪大なる思召の迸りである。

我出征軍人が懇に敵の傷者をいたはり捕虜に仁慈をくはへ又占領地の土民を撫育して「誠の武士よ」と外國の觀戰武官をして感嘆せしめたのも實に故無きにあらずと云ふべきである。

言の葉の花のいろこそかはりけれ
おなじ心のたねと聞けども

『謹解』 ひとしく心の種の言葉の花であるのに咲いた色を見るとこゝろ〳〵に變つてゐる。

歌は人々の心が種となつて咲きいづる詞の花である、されば誰の心とてその誠に相違のあるべき筈は無けれどもそれが歌となつてあらはれてみると千紫萬紅こゝろ〳〵に色香が變つてあやしきことか

なと宣うたのである。おなじ花を歌つても異なつた調べのあやとを御興じなつての御作と拜誦せられる。

さされさへゆくこころちして山川の
淺瀨の水のはやくもあるかな

『謹解』水底の小石までがさらさらと流れゆくやうに見ゆて山川の淺瀨を流るゝ水の早さよ。鶺鴒の聲が寂しくきこゆて岸の岩根の齒朶の葉のそよぎまでが目に浮んでくる御雄大なる御格調の一面には斯く纖麗の御製もあらせらるゝ實に剛柔御心のまゝに御詠みあそばされたのである。

さかしきも愚もあれど人ごとに
あらまほしきは誠なりけり

『謹解』その性質によつて怜悧の人も又さまであらぬ人もあらうけれど、その差別なく人ごとに必ずあつて欲しいのは誠である眞實である。人格の要素は至誠である誠あるおろか者は誠なき利發者に優ること萬々である、誠の伴はぬ才能は實に殆いものである。

むらきもの心つくして報いなむ
おふしたてたる親のめぐみに

『謹解』我身を敎養してくれた親の深い恵には心の限りを盡して報いなければならぬ。ムラヤモノは心の枕辭、ナムは希望の意の助動詞、孝道を御奬めあそばされたいとも畏き御製である「心つくして報いなむ」實に徹底した御敎訓である、おろそかに伺つてはならぬ。

村肝のこころをひろく養はば
　ながき齡もたもたざらめや

『謹解』　世の雜事にはたづさはらずに心を廣くのどかに持つたならば高い齡を保たわぬことはあるまい。

「心をひろく持つ」といふことが長壽法の祕訣である、心を養ふといふことは何よりも易い事のやうでしかも難事である身體の健康に意を注ぐと共にこの聖訓を奉體して悠然と心を持して「世の長人」と仰かるゝやうにしたいものである。

わが庭のおほきのかげは風涼し
　山にひとしと人のいふまで

『謹解』　都の内とは思はれぬ殆ど山奥のやうにあると人々が言ふほどに庭の老樹の蔭に吹き來る風が涼しくて誠によい心地がする。

千歳の老樹鬱蒼として晝なほ暗き吹上禁苑御逍遥の折などの御實感であらせられやう、水清く苔滑らかなる風趣も御言葉の外に伺はれてかしこけれど拜吟すればやがて涼味の身に迫るを覺ゆ。

はまごのの庭の池水あさしほの
　みちたるうへにちる櫻かな

『謹解』　朝汐の滿ちたゝへたる濱離宮の池にちらくと庭の櫻の散り亂るゝさまは得もいはれぬけしきである。

春辰に　兩陛下臨御ありて皇族を始め奉り內外人を召して觀櫻の御宴を開かせ給ふたのは濱離宮であるから定めて御實感の御製ならむと拜察せらる殊に三十八年の御代盛りの聖作なりと承りては一層今昔の感を深うする。

國のためたふれし人を惜しむにも
おもふは親のこころなりけり

『謹解』 國の爲に戰場の露と消えたあたら大丈夫を惜しむにつけてもたのみにする我子に先だゝれた親心はいかゞであらうかそれが氣の毒に思はれる。

國の爲とは云ひながら子等を亡くした親々の心は如何であらうと御同情あそばされたのである、愛兒を失うた老人もこの御製を拜誦しては感激の涙に咽んだことであらう。

弓矢もて神のをさめし我國に
うまれしをのこ心ゆるふな

『謹解』 皇祖皇宗が武を以て御統治になつた大日本帝國に生れた益荒雄は泰平の世なればとて

心を緩べてはならぬ。

「治に居て亂を忘るな」と云ふ聖訓と伺はれる、弓矢は武道をあらはす詞、結句をユルブナと云ふ語が弓矢に照應してうるはしき御調となつたのである。

國をおもふ道に二つはなかりけり
いくさのにはにたつもたたぬも

『謹解』 銃を荷ひ劍を手にして砲煙彈雨の間を馳驅するもの、鋤犂を執り牙籌を持つて家に留るも國家に盡す道には變りが無い。

明治三十七年の御製である、時しも國民の義勇奉公の熱誠が高潮に達して出征するものは花やかに見ゝ家に殘る者は意氣地なく思はれた、英明なる　陛下にはそれ等の事をおぼしやり給うてこの御製をあそばされしものと拜察せらる、廣く限なき大御心のほど今更の如く感泣せらる。

おのがじしつとめををへし後にこそ
花のかげには立つべかりけれ

『謹解』務むべきその日の務を果した後に花を見て遊ぶがよい。

「昨日は東、今日は西」で實に花の盛りには人の心が浮立ちやすいものである、大戰後天下の人心の緩びかけた四十年の御製と承つてをる「その日の務を果して心殘りなく花を見てこそ花の匂ひはあれ」との御聖訓と伺はれる。

たらちねのみおやの御代に仕へにし
人もおほかたなくなりにけり

『謹解』御父天皇の御代から仕へ來つた臣共も今は大方亡くなつたさびしいことである。

御父天皇崩御の後は側近奉仕の老臣共より御父天皇の御事どもをきこしめされてなつかしき昔をしのばせられたであらう、その昔を知れる老臣達がつぎ〳〵に世を去りて今は殘り少くなつたとの御感想であらせらるゝ御父天皇を慕はせ給ふ御孝道の厚さ、老臣を惜しみ給ふ御仁慈の深さ、拜誦すれば覺えず涙がさしぐまるゝ。

あやまちをいさめかはして親しむが
まことの友のこころなりけり

『謹解』過失のあつた場合には互に諫めあうてさうして親んでゆくのが眞實の友情である。

世には交友はおほけれど親友は少い習ひである、宜しくこの聖訓を奉體して、互にその短を警め春風の如く温かき友誼を結ぶべきである。

たらちねの親のこころをなぐさめよ
國につとむる暇ある日は

『謹解』 誰も彼も世の中の務は忙しいことであらうが、その忙しい國務の餘暇にはよく親の心を慰めて孝行を盡せよ。

「職務の暇には親の心を慰めよ」との御聖訓、感泣の至りである、實に「孝は百行の本」と云へる如く能く親に仕ふる子ならでは國家に忠なる臣では無いのである。

おもふことありのまにまにつらぬるが
暇なき世のなぐさめにして

『謹解』 我心に思ふことをありのまゝに歌に調べなすのが政事に暇なきこのごろの慰みである。

御一代の御製實に十萬餘首、政務をみそなはせらるゝ御繁劇の間の御作と承れば眞に恐れ多き極みである、歌は花鳥風月の弄びものではないと云ふ生きたる御教訓を御示しになつて居るのである兎角好む道の爲に世の務を怠る人が多い愼むべきである。

眞心をうたひあげたる言の葉は
ひとたびきけばわすれざりけり

『謹解』 眞情を僞らずにうたひあげた歌は誰も一度耳にすれば忘れぬものである。

「いかに詞巧につらねても眞情を僞つた歌は人を感ぜしむることが出來ない」との大御心と拜察せられる、實に歌の生命は眞情である眞情を外にして歌ありと思うてはならぬ。

こころある人のいさめの言の葉は
やまひなき身のくすりなりけり

『謹解』 思慮ある良臣の諫言は身に病なき時の藥である、卽、心の藥である。身に病ある時は醫師の良藥を以て癒すことを得べきも、心の病を治するには良臣の諫言に賴らざるべからずとの聖旨である、實に 陛下御壯年の御頃には風格高き剛直なる侍臣おほかりしは天下に知れわたつた事である、直諫を容れ給ふこの海の如き大御心にましましたればこそ古今無比なる聖天子とならせ給うたのである。

たらちねのみおやのみやにをさなくて
みしよこひしき月のかげかな

『謹解』 月は昔ながらの月である。この月を見て昔の親のお側に居た時が戀しい懷しい。タラチネは垂乳根で母といはうとする時の枕詞である。近代では親の枕詞にも使はれるやうになつた。御製の意は陛下がまだ御幼少の折、親宮の御殿で御一緒におるで遊ばされた時に同じく月を御覽になつた事を思召し出でさせられて、懷舊の御情をお述べになつたもの。一唱三嘆、無限の琴線に

觸れる思ひがする。

旅ねするやどの軒端のあさければ
枕の上に月のさしくる

『謹解』 御所とは違うて旅館の軒が短いから月の光が枕の上にまでさし込んで來る。金殿玉樓の奥深くして中々月の光りがさし込むといふ樣な事はないが、併、地方へ見學行幸になると、斯樣な御事もあつたであらう。然るにそれをしも亦是一風流とお過ごし遊ばされたのは、物に係はらせ給はぬ深き大御心と拜察し奉らるゝのである。

都にておもひしよりもおもしろし
あがたの里の秋の夜の月

『謹解』　都に居つて秋の月を眺めた時に、若し地方に出て風景の變つた所でこの月を見たならば餘程興の多い事であらうと思つたが、それよりも實際田舍に來て見ると一層趣が深い。

近頃は都會熟が盛になつて、何でも都會でなければならぬもの、樣に云ふが、併し、都會に住んで見ると矢張り田舍が戀しい。またあの山邊に行つたら、この里曲に行つたらと、都會で聯想して見た所へ行つて見ると、事物悉く變化して一層愉快に思ふ、それに引きかへ都會を〳〵熱望して來たものに失望の聲の絶ねぬのは大に考ふべき事であらうと思ふ。この御製は必ずしも左樣な意味の下に御詠み遊ばされたものではないのであるが、併し、少なくとも地方の景物を御賞美あらせられたものである。アガタノサトとは、縣の里、卽ち地方を指したものであるが、何處へ行幸の折りの御歌であつたかは伺ひしる事が出來ぬ。

夏の夜の月の桂のなり所
涼しき風のいかに吹くらむ

『謹解』　夏の夜の月が美しく照り通る桂の離宮には定めて涼しい風が吹いて居るであらう。

明治天皇は如何に三伏の酷暑と雖も、決して恣に御避暑といふ樣な事は遊ばされなかつた。偶、行幸になるといつても、それは必ず國事を御裁量遊ばされる上に就ての事であつて、その他の時は只彼處は涼しいであらう。美しいであらうとの御聯想によつて、自ら慰めさせられたといふ事は實に畏い極みである。嘗てかういふ事があつた。なにがしの大臣の時に天皇の御鬱結を慰め參らせ樣と思つて、京都行幸をお奬め申し上げた時に、能く心を着けて呉れてそれは嬉しいが、京都は好きであるから京都に行くと自然長くなつて、國事を澁滯させるやうな事があつてはならぬから見合すと仰せられたさうである。

遊子悲故郷とか云つて、實際ダレしも故郷は懷かしいものである。漢の高祖が豐沛の父老を訪ひ、佛國のチエールが大宰相となつて其郷先生を尋ねた事は云ふも更なり、豐太閤は中村の古老を訪ひ、大西郷は骨を埋むるも尙且つ故郷の山ならむことを希うた。併し、これ等と比較的に申し上げては甚だ恐れある事ではあるが、陛下が京都をお懷かしみ遊ばされた事は一通りではない。數ある御製の中にも屢々その御心を拜察することが出來るが、しかも絶ねて行幸とては無かつた。若し京都に行つて懷

かしさの餘り自然に滯在が延引する樣な事があつては、國事を進めることが出來ないとの叡慮は、これ國を思ひ民を思はせらるゝ深き大御心であらせられる事を拜察して當時の宮内大臣は滂然として泣いたといふ事である。

さてこの御製中の桂ノナリ所とは卽京都の桂の離宮の事である。又月は別名桂男ともいふ。そこで月の桂といへば、月を假りに人格化して、夏の夜の桂男が照らす所といふ事と、御自身の御成り所たる桂の御所には月が照り輝いて居るであらうといふ事との二つを一緒にして、そこに無上の妙味がある。しかもさばかりの桂の御所も只凉しからうと御追想遊ばさるゝのみで、さうして獨り自ら慰めさせられる御事は只々恐れ入つた御事共である。遊逸三昧に家を外にしたり、避暑避寒で此處彼處と飛び廻る輕佻者輩は猛省一番すべきである。

霧たちてさだかに見えず路のべに
われをむかふる人のおもわも

『謹解』かう霧が深く立て罩めては、自分を迎へに出て居る人の顏さへも分らぬ。惜き事である。行幸を待ち迎へたるその地方の民の心には忝けなさと喜びとで滿たされて居る。畏れある事ながら颯爽たる御風丰をも拜し參らせんと、思ひ勇んで御出迎へ申し上げたのに、生憎のこの濃霧で人民がかなしく本意ながるのは道理至極の事である。所が天皇に於かせられては、かうも熱誠に迎へる民共の顏さへ分らないとお卿ち遊ばされる。日本帝國發祥の源は則ち茲である。

ここのへの庭も野分にあれにけり
賢が伏屋はいかにかあるらむ

『謹解』宮城のお庭も野分で荒れて了つた。手輕にしつらへられた賢の伏屋はどうであるか、定めて一層荒らされた事であらう。

九重は九つの御門の事である、卽ち天子の御殿には關門、遠郊門、近郊門、城門、皐門、庫門、維門、應門、路門がある、これを九重門と稱へる。これから初まつて宮城をこゝのへと訓するようにな

つたのである。又野分とは秋の野を吹きあるく風、卽ち暴風の樣なものである、さて九つも門のある御所の庭さへこの野分で荒れたのであるのから思ふと、片山里の手薄い家は果してどうであらうかと咏ませられたのである。

うたげにはつらなりがたき老人に
をりてをやらむ庭のしら菊

『謹解』 年が寄つたから觀菊の宴にも得列ならぬ老人には、その庭の白菊を手折つても遣はしたい。

老いたるを勞らせ給ふ大御心は茲にも現はれて居る。宴とは卽觀菊の御宴の御事である。折リテヲのヲは一層言葉を强く響かせる時の用字である。また昔から、菊は千年を祝ふ緣になぞらへてあるから、老人の年の更に長かれと、千代こめて憐ませ給ふ思召は、必ずや老人が感泣の涙となるのであらう。

白菊の花ささみちてあしたづの
羽かぜもかをる園のうちかな

『謹解』 園生の白菊は今美しく薫つて居つて、その薫りが飛び交ふ鶴の羽風に搖れる、それは丁度鶴の羽が香ふかとばかりに。

これは赤阪御所の御苑である。白菊の花と鶴の白い羽風と、何といふ優しい取り合せであらう。御苑を罩めた菊の薫り、美しい泉水、白い鶴、といふ樣に聯想して行くと御所の御庭の景色が神々しく眼に寫つてくる。萩の御茶屋の邊りから水清き溪を隔てゝ圓山を仰ぎ見れば鬱蒼として雲を凌ぐ老松の樹の間〳〵に燃んばかりの紅葉は御苑に幾層の風致を添へて京畿地方にも見難き雄大なる實景は拜觀の光榮を忝なうせる人士の感を同じくする處なるべし。

夕日かげてらすを見れば小倉山
松より奥ももみぢなりけり

『謹解』 今まで小倉山の此方ばかりの紅葉を愛でゝ居たが夕日があの松の彼方の方を照らすのを見るとそこにも矢張り紅葉が澤山にある。

小倉山は山城の嵯峨にある事は人の知る處である。百人一首の中でも「峰の紅葉心あらば」云々とあつて、慥に紅葉の名所である。そこで元來紅葉は夕日に照らし出された時が最も見頃なものであるから、花に旭が配合される樣に、紅葉には多く夕日が扱はれる、而して此の御製で特に心を牽くものは夕日の爲めに今まで心附かなかつた奥にまで紅葉があつて、一層興を催すといふ事にある。「松より奥も紅葉なりけり」これで小倉山が實際その名に背かぬ事が分る。彼の京極黄門定家が時雨の亭を結びしもこの山である、齋宮のあとを止むる野の宮もこの麓である。

もみぢ葉のあかき心をやす國の
神のみたまもめでて見るらむ

『謹解』 靖國神社の神靈は國家に盡して殪れた人々であるから、その廣前の紅葉の色づくのを見ては、これも自分等の赤心の現れであらうと愛でゝ見るであらう。

死して護國の鬼となつた英靈は靖國神社に齋き祀られて、皇室からも特別の御會釋を賜つて居る。彼等の心は誠であつた、赤い誠の心であつた。花よりも赤い紅葉の色こそは、さてもその誠を表はす恰好のものでは無いか、おゝ、紅葉よ、赤い誠の現れよ。いかに廣前の秋を飾るにふさわしい取り做しではないか。

なく蟲の聲もまじりて更くる夜の
枕にさむき水の音かな

『謹解』　もう秋も更けた、夜はの枕に響く水の音も寒げである。加へて蟲の聲にも言ひ知れぬ憐れさがある。

蟲の聲と水の音と相和して枕に通ふ樣を、さても美しく唱はせ給へるものかな。靜かな物哀れな秋が更けて行く夜は、詩情も自ら敏感になつて、さゝやかな事でもしみ〴〵と心の奥に響くものである。

しまもさやかに見えてかがみなす
あをうなはらに秋の風吹く

『謹解』　鏡の樣に澄み切つた秋の海のそこゝには遠近の島影がはつきり見ゑて、それからそれへと清い風が吹き渡る。

清澄な秋になつて鏡の樣に海が晴れると、霞に埋れ靄に隱れていつもはおぼろにしか見ゑない島々も鑑て爽かに浮出て、凉しい秋風が島から島に、波から波に吹き渡る樣が、あり〴〵と眼前に見ゑる樣な、心持のよい御製である。

ここしげさここの秋にしも千町田の
みのりよろしと聞くがうれしさ

『謹解』　多端な國事にいそしんで如何にすれば國威を張り國光を輝かすことが出來やうかと思ふて居る時に、この秋の收穫が非常によいと聞いたのはまたなく嬉しい事である。

明治天皇の御胸中には國を思ひ民を愍ませられる大御心の外には何ものも無い。一面に於て日夜國事に盡させられる御傍、秋の實りが能くて民の喜ぶ樣を聞かせられては、御身親らの喜びの如くに思召される程、あり〴〵と伺ひ奉る事が出來る。

春風の吹かぬあしたに散る花も
木かげにのみはこまらざりけり

『謹解』 假令風の吹かない日に散る花でも只木蔭ばかりに落ちるものではないのである。意味深き御製である。誘ふ者が無いからとて油斷をして居ると、何時どんな所へ飛び廻つて居るか分らない。併しその寓意は寓意としても、實際にこれを見る時には言ひ知れぬ感慨があるものである。風も吹かぬ靜かな朝、はら〳〵と亂れ散る花が、自然に飜り落ちる餘勢で以て、意外に遠い所へ落ちるのは見る目に頗る興のあるものである。殊に禁苑の春深うして胡蝶も御惠みの露に眠る夕べの景色を思ひ浮ぶる時は身の塵寰にあるを忘れしむ。

春雨の降る日しづけき庭の面に
ひとりみだれて散るさくらかな

『謹解』 靜に濕やかに降る春雨の庭にはら〳〵と櫻の花が心なくも亂れて散つて來る。靜かな春雨の情を前に咏ませられて、後の句で花がみだれて散ると遊ばされたのは相對上殊に至妙な御製であると申さなければならぬ。一方は靜、一方は動、しかも靜にはゆつたりした長閑な春の氣

分があり、その動には心なくも花が亂れて散るとはいふものゝ、そこにまた言ふ可からざる風情があるものである。

さきつづく花より花にあくがれて
蝶も夢見るひまやなからむ

『謹解』 春が來れば後から後からと咲き續く花に憧れ渡つて飛び交ふ蝶にはゆつくり夢を見て休らふ隙も無いであらう。

梅が咲いた、桃が咲いた、櫻が咲いた、菫が咲いた、蒲公英が咲いた、菜の花が咲いた。咲いた花の香に迷うて飛び廻る蝶はそれからそれと追ひ移つて落ち着いて寢る間もないであらう。何たる寓意多き御製であらう。朝には飛馬輕車、夕には紅燈綠酒、輕薄者流の徒が果敢ない世渡りの程も憐れまれて、一層感慨に堪へぬものがある。

棚ゆひて外にうつさむ藤の花
かかれる松はいたく老いたり

『謹解』松にからんだ藤の花は今年も咲いたが、松の大木はもう餘程老いて來た、木はこれからあの藤の花を抱へる力も無くなりはしないであらうか、外に棚を作つて藤を移し替へて見やう。

松の老いたのを憐はして、からめる藤を他に移さんとの御意には老いたるを勞はり給ふ御仁慈の程ありくと拜察し奉ることが出來て、松に靈あらば定めし感涙にむせぶことであらう。老人をあはれませ給ふ御心の多きも畢竟この大御心の變化としてますく御仁慈の廣きを拜察すべきである。

吹上のそのふの花をいかにぞと
問ふ日もなくて春の暮れ行く

『謹解』吹上御苑には今年も花は咲いたであらうが、どういふ風情であらうかと尋ねる隙も無いうちにもう春は暮て行く、花は散つて行く。

日露隙ありて覺蹤を開いたのが三十七年の二月十日、それから引續いて軍事に大御心を勞せさせ給ひ、夜といはず晝といはず、畏れ多くも玉體に露ばかりの御暇もあらせられなかつた御事は、われわれ臣民も夙にこれを洩れ承はつて感激措く能はざる所であつたが、今この御製を拜して一入恐縮に堪へぬ次第である。然るに山河幾千を隔てた名所の花ではなくして、吹上の禁苑卽宮城内の御苑に咲く花さへも御覽になる御暇がなかつたといふことは畏い極みである。なほ夏の庭のおもに清水の音はきこゆれど掬ぶ暇もなき今年かなの御製と對照拜誦すべきである。

舟ならで行きかひすべく見ゆるかな
霞のうかぶ淡路しま山

『謹解』棚引く霞の上に浮いて居る淡路の島山は舟でなくても行き來が出來る樣に思ふ。

一畔遠く模糊として續くものは海であらうか、否春更けて霞が立て罩めて居るのである。しかもその霞の上に一刷の淡路の島山、海ならば舟で通ふが、今は霞の奥であるから、舟でなくとも行かれさうであるとの御實感を歌はせられたもの、この御製は實際畫である。一度び拜誦すれば須磨の浦の實景彷彿として眼前に徂徠するのを覺ゆる。

子を思ふきぎすの聲をあはれとは
かりを樂しむ人もきくらむ

『謹解』燒野の雉子夜の鶴といふてあるが子を思うて鳴く雉の聲を聞いてはいかに狩りに出たものといつても、必ずや憐れを催すことであらう。

昔和泉式部であつたか「あはれなりいかでか鹿の鳴かむらむ今宵ばかりの命とおもへば」と呼んで夫の狩を止めたといふ事であるが、親子の情は一つである、子を思ふにはまた鳥も獸も變りはない。假令、狩りをすることを此上もない樂みとする者でも、一度あの雉子の憐れみ深い聲を聞いては、そゞ

ろに狩り暮す矢猛心も鈍るであらう。親子の情は自然の情である、凡そ自然に生きるものであつて、自然の情に動かされないものは無い筈である。

おやも子もうちつどひてや軍人
ことしは家の花を見るらむ

『謹解』戰爭も濟んだ今年こそは嘗て軍に出た親なり子なりが歸つて來て心靜かに團欒して花見に樂むことであらう。

この御製は三十九年であるから丁度三十七八年戰役の翌る年である。去年も一昨年も或は親を召され或は子を召されて生死の程も分らぬ軍の旅に、否生きては還らぬ國の御盾となつて戰ひに出て居るのであるから、花が咲いても花を樂む心地もせず、侘しくも留守の春を送つたのであつたが、その親は凱旋して歸つた、その子は武運芽出度く無事に歸宅した。さあ今年の春こそは打ち揃うて樂く嬉しく花を見るであらうと、これも民を思はせられる大御心の發露である。

月かげはかつ見えながら春雨の
しづくぞおつる花の下みち

『謹解』　月影は更に清く照り輝いて居るが花の下道にはまだ春雨の雫が落ちて居る。春雨は降り止んだ。月は照り添うた。露を含んだ花は月の光りに映ねて、又ない幽艶な趣捨て難く、花の下蔭をそゞろありきすれば、月はいよ〳〵輝いて、今まで雨の爲めにその光りを隱されて居つたといふやうな樣もないのに、行く道には雨の名殘の雫がまだ落ちて來る。

しげりあひて木のしたくらさ夏の夜は
月のためにも風ぞまたるる

『謹解』　青葉茂る木の下道はそのしげりの爲めに折角月が照つても照り透らないから、風でも吹

けばその木々を吹きわけて、少しは月の光りもさすであらう。木下闇といつてそこは晝でも暗い、況んや夜は尙更である。何とかして今少し明るくしたいものであるが、それにしてもこゝを明るくするには風でも吹いて來て、木と木との間を吹き分けて呉れる外はない。さうして、吹きわけたならば月の光りも通るであらう、折角四方隈なく照らす月影もこの木下にだけ照り通らないとあつては月の爲めにも氣の毒である。

おくしもの寒さを知らぬ夏菊の
花もうつらふ時はのがれず

『謹解』　夏菊は寒い霜にも犯されないからいつまでも咲いて居るものかといへば、矢張りすがれて了うものである。
霜に傲るの秋菊はやがて霜の寒さの爲めに枯れるが、夏菊は時が早いから霜に逢はない、從つて霜の爲めに枯れるといふ事は無いのであるから、そんなら何時までも咲いて居るかといへば、さうでは

ない、何時かは必ずうつろひ褪せて行く、嗚呼、現し世の定めでは夏菊とても變りはない。

風わたる山した水にただよひて
すずしく見ゆるうさぐさの花

『謹解』山した水に風が吹きわたつて萍の花がそよ〳〵と動いて又なく涼しう見ゆる。美しい涼しい御製である、山風が靜に萍の花を吹き水を吹いて、萍はさゆらぎ、水は細かいさざ浪を立てる、顧れば山青く雲白く幽玄の氣が身に迫つて、夏を忘れる涼しさ、只拜誦しただけで涼味腋下に生ずる感がある。

生垣のかなめのうへに咲きながら
根ざしは見えぬひる顔のはな

『謹解』青々と生ひ茂る生垣のどこに根を卸して居るのかは分らぬが、さても優しく咲いた事がほの花ではある。

根ざしは見えぬといふ第四句に無限の情がある。生垣にかくれて見えないけれども立派に根ざしが堅まつて居ればこそあのやさしい花は咲くのである。花の咲いたのは譬へて見れば先づ成功した時である。併しその成功には人の知らない努力が潜んで居る。花の咲くには咲くだけの素質がある。成功するには成功するだけの素因がある。見えない根ざしを思ふ所に花の咲く素質を解し、人の知らない努力を思ふ所に成功の素因を知ることが出來る。

雲ばかり空にまよひてゆふだちの
ふりいでぬまの暑くもあるかな

『謹解』暗雲低迷、夕立が降りさうで降り出さない間の蒸し暑さはまた格別である。

こは三十八年の御製であるから、今から推測して見ると丁度日露戰爭が終結に近づいて休戰に入つ

た時であつたかと思ふ。只單にこれを夕立雲が立ちさわぐといふ實感をお咏み遊ばされたと見奉る外に、或は時局を御洞察になつた御意味を含ませられたものではあるまいか。彼の老獪な舊露國があらゆる御數を弄して外交界に跳梁し、或は暗中飛躍ともいふべきか――さる樣を高所に御遙觀になつたと見參らせてそこにも立派な意義を見ることが出來る。

ゆふべゆふべすずみの庭に立つことも
ことなきときにあへばなりけり

『謹解』 毎夜々々庭におり立つて心行くばかりに涼を納れるのも太平無事な平和の時になつたからである。

三十七八年の戰役も過ぎて、これから軍事に費した費用も回收し得られる樣になつた。戰爭の結果として國威は揚り國光は輝く、先づこれで國家は安泰であると思召された時に於て、初めて徐に夏の夕べを涼風の吹く御庭に立たせられた。これは實に四十年の御製である。

國のため身をかへりみぬますらをを
あまた得にけりこの時にしも

『謹解』 この非常な時に當つて國の爲めには一身を捨て、顧みない程の益良雄を澤山に得た。

一旦緩急、義勇奉公とはこれ明治天皇の御聖訓である。我々臣民はこの御聖訓を朝夕奉體して決して悖るものでは無い。されば一度び、露國と隙を生じた時には、國民總ては猛然振ひ立つて一身の安きを顧みない。併しこの心は祖先傳來の日本魂である。彼の大伴氏が「海行かば水積く屍、山行かば草むす屍、大君の邊にこそ死なめのどには死なじ」と歌ふたのはそれである。然りこの祖先傳來の精神に加へて、更に明治天皇の御聖訓を拜した國民はどうして逸惰な心持を續けるものか、彼の橫暴なる露國に向つて遂に戰を宣せられた時に方つては、忽ち萬死を犯して顧みぬ忠勇の將士となつて、思ふ樣に彼れを討ち懲したことを、いかにすがくしく稜した御事であらう。